
ミックスジュース

劉生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミックスジュース

【Nコード】

N0888V

【作者名】

劉生

【あらすじ】

名探偵コナン短編小説集です。基本一話完結なので、読みやすいと思います。是非、お気に入り作品を見つけてみて下さい。※リクエストも募集中です☆

C h r i s t m a s ! (前書き)

初短編集です。まずは季節はずれのクリスマスから…

C h r i s t m a s !

今日はクリスマス

街は美しいイルミネーションで包まれている。
綺麗に着飾った女性と、その隣で鼻を延ばしている男性がやけに目に付く。

今日は園子と出掛ける予定だったが京極が急遽帰って来れることになり、中止になった。

園子は何度も謝っていた。
でも、とても嬉しそうだった。

そりゃあ、今日という日に大好きな彼に会えるんだもんね。

蘭は自分のことのように嬉しかったがその反面、羨ましいと思うのも事実だった。

結局私だけかあ…好きな人に会えないのは。

涙が溢れてくるのを我慢して、帰路に着いた。

あのまま帰って寝てしまったのだろう。時計を見ると午前3時を差していた。

水を飲もうとリビングに行くと、宛先・差出人不明の茶色い封筒がテーブルに置いてあった。

——なんだろう、これ。

開けてみると、そこには細長いプラスチックの箱とメモがひとつ。

“Merry Christmas! それ、蘭に似合うと思ってよ！
サンタより”

箱を開けてみると、ハート型をした小振りなペンダントの付いた、ネックレスだった。

「なーにが“サンタより” よ！ていうか来たなら言ってくれれば良かったのにー！」

そんな皮肉を言いつつも、抑えきれない喜びに口元を弛ませる。

「喜んでくれたみたいだな。」

笑顔で部屋を去る蘭をドア際で隠れていたコナンが呟いた。

「俺ももう一回寝よ」

“ I love you
to R from S ”

ペンダントの後ろに刻まれたその文字に蘭が気付くのは、また別の機会……

わたしの王子さま(前書き)

歩美ちゃん目線です

わたしの王子さま

「…こうして、王子様は悪い怪獣をやっつけて、お姫さまと幸せに暮らしましたとさ。」

そう言いながら閉じた絵本を、そっと枕元に置く。

「ねえ、お母さん？」

「ん？なあに？」

「歩美もね、王子さま、見つけたよ！」

「へえ、どんな子かしら？」

「えっとねえ、危ないこともできる勇気があって、悪い人たちを退治できちゃう、とってもキラキラしてる本当の王子さまみたいな人！」

顔をピンク色に染めながら、少女は言う。

「それじゃあ、戦隊ヒーローと変わらないじゃない」

クスクスと笑いながらそう返し、もう寝なさい　と電気を消して部屋を出る。

少女はぷくうーっと頬を膨らませる。それは小学一年生である彼女に似つかわしい行動であった。

「明日も、コナンくんに会えますように！」

自分の理想の王子様象と想い人を照らし合わせて少女は深い眠りについた。

「死ぬときは、一緒だぜ？」
(前書き)

死ネタです。すみません…
苦手な方はご注意を。

「死ぬときは、一緒だぜ？」

——ここはどこだろう

何だか体がふわふわして、
暖かい

——ああ、そっか
私、死んだのね

先日、組織壊滅の際
爆発に巻き込まれたことを思い出す
新一を助けに行ったのだが火に囲まれ、二人で取り残されてしまった

——みんな、悲しんでるかなあ

見渡すと、そこは一面、花で広がっていた

どうやらここは地獄と言うよりは、天国と呼ぶ方が相応しいらしい

——ひとりぼっちは、嫌だよ…

周りの風景に似合わず、膝を抱えて顔をうずめる。

——新一…、逢いたいよ…

その時、誰かが背後からやって来て
彼女の頭を優しく撫でた。

刹那、彼女は微笑む。

彼女は、最期の記憶を思い起こした。

風が、二人を優しく包む。

一生一緒

そしてその先も、

いついつまでも…

光

以前までは、あなたに対して
持つてはいけない感情を抱いてしまっていた

そう、恋心…

でもあなたには、あなたにとってもお似合いで素敵な彼女がいた

私はこの感情を抑えるのに必死だった…

一番憎むべき標的のはずの私を、あなたは受け入れてくれた

顔を見るのも苦痛だったのに
彼女の優しさに惹かれ

いつの間にか、彼女をお姉ちゃんと重ねていた

そんな太陽みたいな二人は

今まで地中深くまで潜っていた私には眩しすぎる

だから、いつか私も

あなたたちに釣り合うような光になりたい

だから私は逃げない

あなたの本当の姿で、

本当の笑顔を取り戻すまでは…

黒か白か、それとも…（前書き）

ジン↓シェリーです。二人は組織にいた頃、肉体関係にあった設定です。

黒か白か、それとも…

…シェリー

あの日の夜のことを、覚えてるか？

お前は俺に抱かれながら、
何度もこう呟いたよな

“あの頃のあなたに戻ってほしい”
と…

何を根拠にそう言ったのかわからねえが、
俺も人の子だ。

黒の闇に完全に飲まれていない時期もあっただろうよ

でも俺は、お前をもう一度

俺の元につれて帰るまで

手放すつもりはねえ

たといえそれが、

鮮やかな緋色に染まった姿であつてもな

それまでせいぜい

“逃亡者”としての生活を楽しむんだな

じゃあな

恐怖に怯えたお前の顔を見るのが楽しみだぜ…

平次の気持ち 1 (前書き)

えっと、鈍感平次くんが自分の気持ちに気付いていくお話です。
一話では収まらなかったので、3部に分けてみました。

平次の気持ち 1

——和葉は俺の幼なじみや。

その事実が、一生曲げられることはないだろう…

——でも、和葉は俺の子分か？

自分で口に出した方がいいが、それが正しいかどうか分からなくなってきた。その言葉が、何だかしっくり来ないのだ。

平次は、幼なじみとの17年間を振り返ってみる

親父の手錠で遊んで、抜けなくなってしまったとき

——あん時は大変やったなあ。風呂も一緒やったっけ。てことは、俺は和葉の裸を見たことがあるわけか。

…ん？何で俺、顔熱くなってんねん。

コナンたちを初めて大阪へ招待し、誤って腹を拳銃で撃たれたとき

——あん時、和葉は俺のことごつつ心配しとったなあ。俺がほんまに死ぬときも、きつとあんな風にわめくんやろな…。まあ、俺の死を泣いてくれる奴がおるっちゅうんは、ありがたいことやな。

人魚のいる島で調査中、二人で崖から落ちそうになったとき

——あれはごつつやばかったで。どうにか和葉だけでも助けようとしたときに、あいつが矢を俺の手の甲に刺したんや。全く…、あれで余計気い入ったわ。俺は絶対、生きてこいつを連れて帰らんとあかんってなあ。

東京に来て、脱税指南のテープを取り戻そうとしていた悪徳弁護士に監禁された時

——あん時はほんま、俺も人生最期かと思ったわ。まあ、死んでも捕まえたるって思っとったけどなあ。

でもあの時、和葉に残す言葉があるってとっさに言っただけ…

ほんまは俺、なんて言うつもりやったんや？

東京で、星河童吾のマジックショーを見に行って、事件に巻き込まれたとき

——あん時は、和葉が他の男とケラケラしたりチャラチャラしたりすんのを見てたら、何やイライラして推理に集中できひんかったなあ…。そんな時は子分やからやって納得しとったけど、今考えるとやっぱなんか違う気がするんや…

和葉、お前は一体俺の何なんや。

——続く…のか！？

平次の気持ち 2

——確かあん時、工藤に

「お前、ガキだな」って言われとったな。今思い出してもムカつくけど、あいつは何か握っとんで。とりあえず、聞いてみよか。

R R R . . .

『服部か？どした？』

「なあ工藤、俺最近、和葉が俺の何なのかわかんなくなってきたわ。」

『はあ！？』

携帯電話のスピーカー越しでもわかるような、相手の間の抜けた声が聞こえてきた。

「お前マジックショーの後起きた事件で俺に“ガキやな”って言うたやんけ。ガキにガキ言われて思い出してもムカつくが、何やお前、

なんか知ってんやろ？いくら自分で考えてもわからんのや。」

『…はあ…。』

さっきと同じ返事だったが、今度はイントネーションが下がり、明らかに相手に呆られている。

『服部、それは俺の口からは言えねえ。真相は、自分で導き出さなきゃ意味がねえんだよ』

「なっ、なんやねんそれ！どーいう意味や！」

本当に意味が分からない　と言った様子で、平次が反論してきた。

『んじゃあヒントだ。服部、もし和葉ちゃんが突然お前の目の前から居なくなったら、どうする？』

「なんや事件か？それだったら犯人の痕跡から推理で後を追って…」

『そうじゃなくて！』

電話越しでも、平次が首を傾げている様子が目に浮かぶ。これが漫画ならきつと、頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいるだろうと、コナンは思った。

『じゃあちよつと変えて、もし和葉ちゃんが、彼氏できましたーっ
てお前の所に嬉しそうに報告しに来たらどうする?』

「和葉に彼氏か!?!…んなのあり得へんやろ!だって和葉は俺と…」

『俺と、なんだ?』

「……。」

『で、お前はどーすんだよ』

「そりゃあもちろん、その男から和葉を奪い返して…」

『そういうことなんじゃねーの?』

ニヤツと笑ってコナンは話を続ける。

『ま、そういうことだから!じゃーな、なんか分かったらまた電話
しろよ!』

「あ、おいっ…、って、切れてしもーた…」

通話の切れた携帯を閉じ、平次は呟いた。

「…はあ、そういうことって、どういうことやねん…」

——和葉が他のやつと付き合う？そんなの考えたことあらへん。
だって和葉は物心ついたときからずっと傍におったし、俺以外のやつが和葉と一緒にいるとか、考えられへん……

そういえばこの前クラスのやつが、

「俺の好きな人が他の男と一緒に喋ってるの見るのが辛いんや。そんなの考えたくあらへん」
って言うとなんか？

…そういうことなんか？

——俺は、和葉のこと好きやったんか？

そう意識したとたん、頭がカーッと熱くなるのが感じた。

「は、ハハハ…。そんなわけあらへん。でも待てよ？そう思うと今までの疑問も全て辻褄が合うで…」

和葉が他の人の腕に抱きついたときに、自分がイライラしていたわけ。

監禁されたときに、自分が彼女に一番言いたかったこと。彼女を失いたくない理由――…

「はぁ…、今更どうしろっちゅうねん…」

平次は再び携帯を開いた。

平次の気持ち 2 (後書き)

自分で書いてて思うんですが、平次はどんだけ鈍感なんだと！
どうやって気持ちに気づかせようかほんと悩みます。

ていうか、こんな事しといていいのか私！

受験生だろ（笑）！

平次の気持ち 3 (前書き)

ネタがなくなってきた劉生です。

思い浮かぶ時はパツと思い付くんだけどな

というわけで、リクエスト募集中です。

原作CPなら何でもOKです！

平次の気持ち 3

携帯の着信画面には
“服部平次”の名前。

——…んだよ、まださっきの電話から1時間ぐらいしか経ってねー
じゃねーか

少しムツとしながら、それを耳に近付けた。

『はい、もしも…』

「くどおお〜」

『なんだよ服部、さっき電話したばっかじゃねえか！』

「工藤 俺、わかってしもたんや。和葉が俺の何なのか。」

『へ、へー。それは良かったじゃねーか…』

「工藤お、俺どうしたらいいんや？今更過ぎて何したらええんかわ

からんのや。」

『そりゃあお前、彼女に告白するしかねーんじゃねえか？彼女もきつと、待ってるぜ。』

「い、告白……」

どうやら平次は固まってしまっているらしい。

『今まで散々迷惑かけてきたんだろ？そこはお前の口から言うべきなんじゃねえか？』

「……。」

『おい、はっと……』

「いよっしゃあ！男なら一発かましたらんな！ありがとな、工藤！また電話すんわ！お前もはよ元の姿に戻らんと姉ちゃん捕られてしまうでー。ほな！」

『…っちょっ、』

ツーツーツー…

——…全く…

その夜。

「コナンくん！さっき和葉ちゃんからメールもらったんだけどね、服部くんと和葉ちゃん、付き合うことになったらしいよ！」

「えっ…」

「服部くん、こういう時意外とやるのね！全く、ウジウジして何も言っていない誰かさんとは大違いだわ」

「ははは…」

——俺も早く戻んねえとな。

親友の意外すぎる行動に、焦りを感じるコナンであった。

家族＋α（前書き）

こんばんは。

今回はななみさんのリクエストで小×英を書いてみました！
ななみさん、リクエストありがとうございます（＾Ｏ＾）

なんか蘭目線で…

はつきり言って駄作です（泣）

家族＋α

私は見てしまった。

お父さんが、女の人と歩いているのを――：

今日は午後、コナンくんと買い物に出かけていた。

お父さんは依頼人と会うから　と言って、ついては来なかった。

仕事があるのは喜ばしいこと！

私たちはいつもと同じようについて行こうとしたけど、お父さんはそれを全力で制した。

何か怪しいと思ったけど、どうせまた、競馬や麻雀でもするんだと思っ
て、あまり深く考えなかった。

そんな時に偶然目撃したお父さんの姿。

後ろ姿だけじゃよくわからないけど、相手の女の人は結構若そう。
髪はセミロングくらいかな？清潔そうな少し柄の入ったワンピース
を来ている。帽子を深く被っていて、ここからじゃ顔がよく見えな

い。

「行くよ！コナン君！」

「うっ、うん…」

私たちは、お父さんの後を追うことにした。

二人はちよつと高級そうなレストランに入っていった。こうなったら、レストランから出てきたところをとっつかまえてやるんだから！

…でも、どうして？

どうしてお父さんもお母さんもすれ違ってばかりなの？

二人が別居し始めて、もう10年。私の10年間の努力は、何も報われなかったのかな…？

でも、まだ私、諦めないから！お父さんを説得してみせるんだから！
！ちようにど食事が終わったみたいね。よし…！

「ちょっと、お父さん！」

「ら、蘭！？お前、どうしてここに…」

「それはこっちの台詞！依頼人と合う約束じゃなかったの？それに、その女の人…」

「あら、私のこと？」

そう振り返った女の方は、私が良く知っている人物だった。

「え…、お、お母さん！？どうしてお父さんとお母さんが一緒にいるの！？それにお母さん、その格好…眼鏡はどうしたの？」

「一緒にいちゃわりーのかよ…」

「それにこれは、単なるイメチェンよ、イ・メ・チェ・ン！眼鏡はちょっと割れちゃったから、代わりにコンタクトをしてるだけ。」

私は安堵したのか、全身の力が抜けて、その場に座り込んでしまった。

「よ…、良かったあゝ」

でもそこでお父さんが私に、

「蘭、お前に大事な話があったから、いったん家に帰るぞ」

と真剣な顔をして言うから、二人は寄りが戻ったのかな！？…と思っただけ、お母さんが

「あなた、今のこの子にはまだ荷が重いんじゃないかしら…」

なんて言ったから、私はまた、どん底まで落とされた気分だった。途中でコナン君が私に何か言ったようだったが、そんな事も耳には入ってこなかった。

私はずっと俯いたまま、お父さんとお母さんの後ろを追って、家路についた。

「話っているのはな、その…」

家に着いてすぐ、お父さんが口を開いた。

嫌なことだったら、絶対聞きたくないよ——…

私は耳に手を当てながら聞いていた。

「あのね、蘭。よく聞いて欲しいんだけど…、あなたに兄弟が出来たみたいなの。」

「え…？」

「家のことや学校で忙しい今はまだ、言わない方がいいと思ったんだけど…。だからまた、私も来週からここに住むわね？」

「うそ…」

「本当よ。あの男以外に誰がいるっていうの。ねえ、あなた？」

「あっ、ああ…。そういうことだから、これから大変だと思うけど、よろしくな、蘭。」

「ありがとう、二人とも。おめでとう！」

私は全力で二人に微笑んだ。

そうしたら、二人も全力で微笑み返してくれた。

お母さんが出て行ってから、お父さんとずっと二人だった。

そこにコナン君がやって来て、お母さんが帰ってきて、そして新しい命が……

私の努力は無駄なんかじゃなかった。ありがとう、お父さん、お母さん。

明日からまた、忙しい日になりそう！

家族＋α（後書き）

「こんな感じのお話を読んでみたい！」

「○○と○○で無駄にイチャイチャさせて！」

なんて、あなたのわがままをこの文章力のない劉生が書いて見せます。

現代文の模試の練習だと思って：（泣）（笑）

0 i s t a r t (前書き)

72巻ネタです。

蘭ちゃんの切ない思いを文字にしてみました。

0 i s s t a r t

——このまま新一を待っていてもいいのだろうか

そんな言葉が頭の中で行き場をなくしていたとき、
ロンドンへの招待状を貰った

良い気分転換にはなるかもしれない

それに、ロンドンと言えばシャーロック・ホームズ

やっぱり推理好きの幼なじみの顔が頭から離れなかった

目的地で偶然会えたのは良かったが、
自分の気持ちに気付いてくれない彼に、苛立ちを覚えた。

「探偵なら私の気持ちぐらい理解しなさいよ、馬鹿あ！」

そう言って走り去った彼女を捕まえて、彼は言った

「Oは全ての始まり！そこから出発しねえと何も生まれねえし…何も達成できねえって…そう言っとけよ！！」

そう、全てはここから始まる。

“ラブ”のなる木はこの先、花を咲かせることも、枯れさせることもできる。

それを決めるのは自分たち次第。

私は信じ続ける。

彼が帰ってくるまで：

そう誓って、彼女は自分と似た境遇にいた人物に、
この言葉を教えるのだった。

0 i s t a r t (後書き)

次は新一側も
書いてみたいな！

Wedding! (前書き)

えーっと、新蘭です。

設定は付き合い始めてすぐぐらいです。

多分こういうのを、ベタっていうんですかね (笑)

Wedding.

今日は帝丹高校学園祭

模擬店や演劇、ゲームコーナーや展示など、目当ての場所を目指してたくさんの人で溢れ返っている。

今年の目玉は何と言っても、帝丹高校で最も美しい女性と、最もイケてる男性を選ぶ、いわゆる“ミスコン”だ。

「もう、園子ったら…」

親友の策略にまんまと乗っかってしまった蘭は、ミスコン出場者の控え室で準備をしていた。

「らん！」

「もう園子っ、どこ入ってたのよ」

「ごめんごめん、姉貴からこれを借りに行ってたさ…」

そう言って園子は、手持ちつきの大きな箱を指さした。

「…すごく大きなメイクボックス…。でも良いの？私なんかが借りちゃって。」

「いーのいーの、ちゃんと許可は取ってあるし。蘭は化粧なんてしなくても十分美人だけど、女子にはたまにはこういうのも必要じゃない？新一くんに見せて、アッと言わせてやろうよ！」

「う、うん…」

そう言って園子は自慢げにウインクをした。

蘭の衣装は真っ白なウエディングドレス。演劇部のもので生徒手作りだったが、大事に保管されていたのであろう純白のドレスは、どの女の子が見ても輝いて見えた。

「さっ、とつとと準備しちゃお！」

「う、うん！」

そう言う園子は、慣れた手つきで蘭を美しく改造し始めた。

まずはアイシャドウで目元を立体的に表現し、アイライナーを使って更に強調させ、そしてビューラーで、まるでフランス人形のようにまつげをくるんと上にあげ、そして最後に、マスカラをたっぷり塗ってアイメイクを仕上げていく。

頬はピンク色のチークで
女の子らしさを強調する。

そして、綺麗なストレートの髪の毛をコテで緩く巻き、さらに大人っぽくする。

最後に可愛いピンク色のリップグロスを唇にたっぷり塗った。

「カ・ン・ペ・キ♪」

蘭は、鏡に移った自分を見つめた。

「すごい…自分じゃないみたい！」

「でしょ？蘭はいつも部活や家の事で忙しくて、あんまりこういうこと出来ないものね！ほら、もうすぐ出番だから、早く舞台裏行かないと！」

「うっ、うん。ありがとう園子。頑張ってくるね!」

園子は、笑顔でステージへと向かった親友を送り出してそっと呟いた。

「さて、あっちはどうなったかな…?」

……不適な笑みを浮かべながら…

——舞台裏

「ミスコン出場者はこちらへ集まってください!」

係の生徒が先導して、イベントを進めていく。学園祭一人気のイベントなので、係になった生徒たちは随分と張り切っているようだった。

「えーっと、召集場所は…」

「ら、蘭!?!」

「えっ：新一！？」

そこには白いウエディングスーツに身を包む、新一の姿があった。前髪を多少横に流し大人っぽくしたその格好は、どの女子生徒が見ても思わず「かっこいい」と口を漏らすであろう。

——観客席

「中道くん！」

「おお、鈴木か。」

「どう？ そっち上手く行った？」

「ああ、毛利のオフショットを中村にやる代わりに出ろって言ったら、あっさり引き受けてくれたよ。」

「あゝ、中村くん、蘭のことが好きで有名だもんね。そりゃあ妻が無防備に寝てるところの写真なんて、彼女に好意を抱いている他の男になんか渡せないわよねえ…」

「そっちはどうなんだよ。」

「ええ、新一くんに蘭のウエディングドレス見せたくないかって言ったら、表には出さなかったけど案外乗り気だったわよ！」

二人は周囲がドン引きするほど、それはそれは悪い顔をして笑って

いたのであった…。

——再び舞台裏

「なんで蘭がここに？」

「私は、園子に言われて…新一は？」

「俺は中道と裏取引を…あっ！」

新一は慌てて両手を口で押さえた。

「裏取引いゝ？」

「なっ、なんでもねーよ！それより女子の方、召集かかってるぜ。」

「あ！そうだった！じゃあ新一、また後でね！」

慌てた様子で女子の集まる方に向かった蘭と、自分を送り出した新一を横目に見て、二人は思うのだった。

（蘭のやつなんか…、）

（今日の新一、なんか…）

（すっげえ可愛い…）

（すっごくカッコいい…）

司会者が舞台上に立ち、イベントを進めていく。

参加者は男女各15名。

どの生徒も美しく着飾っていたが、やはりあの二人はずば抜けていたであろう。誰もが二人を見てうっとりとしていた。

各出場者が紹介され一人一人、自己アピールをしていた。

ダンスを披露する者、歌を披露する者、なわとび、絵、先生の真似……。中には変顔をする出場者もいた。

そんな中、蘭は空手を、新一はサッカーを披露して見せた。

イベントは順調に進み、残るは優勝者の発表のみになった。

「では最後に、グランプリを発表します。栄えある今年の、ミスタ―帝丹、ミス帝丹は――」

「3年B組の工藤新一さんと、毛利蘭さんです！おめでとうございます！」

その瞬間、観客からわっと歓声が上がった。

「優勝したお二人には、トロピカルランドの特別無料招待券と、お二人のクラスに学食500円分券をそれぞれ人数分、差し上げます！」

「「よっしゃあ！」」

そう言ってハイタッチしたのは、観客席で二人を見守っていた中道と園子だった。どうやら学食券が欲しいがために、手を組んでいたらしい。

——イベント終了後、控え室

「まさか二人して優勝するとは思わなかったよな」

「そ、そだね…。」

（…大丈夫かな、聞いているかなあ？）

蘭は今、彼に一番ぶつきたい質問を聞いてみた。

「ね、ねえ！新一！」

「ん？」

「この衣装、どうかな…」

そう言ってクルッと一回転する。裾がふわりと上がって、まるで絵本に出てくるお姫様のようだった。

「ああ…」

新一は蘭を文字通り、“まじまじ”と見た。しかし、クールな態度とは裏腹に、初めて正面から彼女を見るきっかけをもらって内心喜んでいた。それまで何だか照れくさくて、きちんと見れていなかったのだ。

「衣装というより…、衣装もだけど…、その、蘭がすっげえ綺麗だから、びっくりした…」

「え？」

「もっ、もうこんなこっぴどかしい台詞、二度と言わねえからな！」

「えー！もう一回言ってよお！よく聞きとれなかったし！」

「ちょっ、お前、聞こえてただろ？」

いつものバカップルぶりを発揮する二人。もしここに園子やクラスメイトがいたら、良いネタにされていただろう。

「それより蘭、この招待券でトロピカルランド、行くだろ？」

「うん！行く！ペアチケットが2組だから、服部くんと和葉ちゃんも呼ぼうか！」

「そ…、そうだな！」

（ま、いっか。）

2人っきりでないことに、内心がっかりする新一であった…。

――帰り道。

「あーあ、せっかくだから、もうちょっとウエディングドレス着ておきたかったな。」

「…これ以上蘭がそれを着てたら俺、耐えらんなかったぜ？」

「え？なんで？」

「だって、だって、蘭のそんなカッコ、他のヤツらには見せたくねえし…」

彼がボソツと言った台詞を聞いて蘭はニコツと笑うと、機嫌良く鼻歌を歌い始めた。

そんな蘭を横目で見て、新一がもう一度、聞こえるかどうか分からないくらいの声で呟いた。

「あーあ、俺が最初に着させるつもりだったんだけどな…」

「新一、何か言った？」

「い、いやっ、なんでもねえ…」

それが現実になるのは、

もう少し先の事…

K i s s m e ? (前書き)

すみません、ちょっと今予備校が忙しくなっちゃってしまって、せっかくリクエスト頂いたのに遅くなりそうです…。

というわけで、最後のストックを配信いたします(笑)

K i s s m e ?

「ねえ、蘭は新一君とキスしないの？」

「はあ？」

平日の昼下がりの午後。

大学の講義を終えて、蘭と園子は駅前の喫茶店で談笑中…のはずだったのだが、それを覆すように発せられた園子の言葉。

「だーかーらー！蘭は新一君としないの？キ・ス！」

「なっ、なんでさっきまで丸山教授の頭の話だったのに、急にそうなるのよ！」

「それはそれ、これはこれよ！」

顔を多少赤らめながら反論する親友に、口元を緩める園子。高校生の時から何も変わらない二人の仲がとても心地好かった。

「なんでいきなりそんなこと聞くわけ？」

ジト目で返してくる蘭に、園子は少し切なさそうに返答する。

「うん…、なんか真さんって、そういうの積極的なタイプじゃないじゃない？だから私、本当に好かれてるのかなーって不安になっちゃって…。」

「園子…」

「だから、蘭たちバカカップルはどうなのかなって思っただけ！」

「もうっ、バカカップルなんかじゃないっ！」

「えへへーっ」

「うーん…、新一も、そういうのあんまり積極的じゃないなあ…。」

「え？そうなの？新一君が蘭に告白して正式につきあい始めてからラブラブモード全開だったから、てっきり会う度にしてるもんかと…」

「なっ、そんなわけないでしょ！私だって最近、いつしたのか覚えてないほどだよ！」

「じゃあ蘭は、不安になったりしないの…？」

親友の真剣な質問に、蘭はふっと優しく笑ってから答えた。

「うーん、不安じゃないわけじゃないんだけど…、私思うんだ。キスってめったにしないものだから良いのかもって。毎日してたらドキドキ感とかなくなっちゃいそうじゃない？」

確かに不安にはなるけど、その分したときの嬉しさは何倍にもなり、私のこと大事に想ってくれてるんだなーって。

だから私たちは、私たちのペースで行けたらいいなって、思うんだ。」

「…そっか、そうだよね！」

「うん。もしかしたら京極さんも、同じように不安に思ってるんじゃないかな？たまには園子からも積極的になってみれば？」

「うん、私頑張ってみる！蘭ありがとう。…なんかホッとしたらお腹減っちゃった！すいませ〜ん！イチゴパフェください！あっ、そういえば、青子ちゃんと快斗君カップルね……」

再びガールズトークに花を咲かせる二人であった。

その夜。

（…園子にはああ言ったけど、私もたまには自分から積極的にならなくちゃだよね）

「新一、紅茶入ったよ。」

「おっ、サンキュ。」

ここは工藤家。蘭が作った夕食を食べ終えて、今はソファに座って推理小説とにらめっこしている。

そんな新一を見てると、何だか面白くなかった。

（推理小説に嫉妬するなんて、私どうかしちゃったのかな。）

そんな自分に内心あきれながら、てててと相手の目の前まで行くと、やっとそこで自分を見てくれたことに安堵する。

「ねえ新一、ちょっとだけ目つぶって？」

「あん？何だよ」

「いいから！」

良いところだったのに．．
と呟いて、渋々目を瞑る。

蘭は新一の膝の上にちょこんと乗ると、頬に触れるかどうかかわからないくらいのキスを一つ落とした。

新一は、一瞬何が起きたかわからなかったが、目を開いて目の前の人物の真っ赤な顔を見ると、すぐに察知した。
同時に自分の頬も段々熱くなって行くのを感じた。

「だ、ダメだった？」

上目遣いで自分を見る彼女に、反論する理由はなかった。普段は自分からそういうことをしないというギャップもまた、彼のスイッチを押してしまう要因だった。

「…ほっぺただけじゃ、足んねえ。」

「えっ、」

「もっと…、頂戴…」

——後日談。

『真さんも同じ気持ちだったみたい！蘭のアドバイスのおかげで上手くいったよ！ありがとう（＾Ｏ＾）』

自分もそれがきっかけで色々あった、とは言えない蘭であった。

K i s s m e ? (後書き)

私は、新一君は責めだと信じてやまない!!
：なーんて(笑)

普段は照れ屋な新ちゃんも、男の子ですからねえ
自分に正直になってもらいたいものです↑コラ

次にお会い出来るのはいつかしら?
なるべく頑張りますので
応援よろしくですO(^ O ^)O

甘酸っぱい恋物語（前書き）

お待たせいたしました。シンゴ様リクエストで、コナン×歩美（十事件）です。

意外と早く書き終わったので、ほっとしています。

えーっと、あまり甘くはないです、はい。

甘酸っぱい恋物語

夏休みの午後。

今日も少年探偵団は街の平和を守るため、パトロールに……と言う口実で、今日も元気に遊んでいた。

歩美、光彦、元太の三人は始めはやる気だったものの、公園を通りかかった時に同じくらいの子どもたちが遊具で遊んでいるのを見て、思わずそうせねばいけない状態だった。

「いただきますよー！えいっ」

5人はそばにあったボールでサッカーをし始めた。そのルールはどこかおかしく、眼鏡の少年対4人という、なんとも不公平なものだった。

「ったくよお…、こんなの全然平等じゃねえじゃねえか！」

そう文句を漏らしながらも懸命にボールを追いかけている少年を見て、クスリと笑う人物が一人。

「あらあら、子どもに対してムキになるなんて、随分不親切な探偵

さんね。」

「ほっとけ…」

こそこそと話をする2人を見て、歩美はいつも思っていた。コナンと哀、そして自分を含む3人の間には、何か入り込めない厚い壁がある、と。

「おい歩美、ボール止めんなよ！」

「あつ、ごめん！いくよー、そーれっ！…あつ……」

歩美が蹴ったボールは角度をぐにやりと変換させ、公園奥の茂みの中へと吸い込まれていった。

「おいー、どこ蹴ってんだよお」

「ごめん！すぐに取ってくるね！」

そう言うと、歩美はボールを追って茂みの中へ消えていった。

「歩美ちゃん、どうかしたんですか？」

「…さあ？」

「えーっと、ボールボール…あつ、あつた！
…え、あ…、あなた…誰？」

「歩美ちゃん、遅くないですか？」

「そうね。ボールを探しに行ってもう5分は経ってるわね…」

（…確かに、ちょっと戻ってくるには遅いな…）

「俺、ちょっと見てく…」

「キャアア——！！！！！」

その瞬間、歩美と思われる少女の悲鳴が聞こえた。

「おい今の、歩美の声じゃねーか？」

「あの林の方から聞こえましたね。」

「とにかく、行ってみるぞ！」

4人は声のした方へ向かった。そこには丁度、歩美を連れ去ろうと車に乗り込む男の姿があった。

「コナンくん、助けてー！」

「歩美！」

その声に気付いたのか歩美を攫った誘拐犯は、すぐに車を発進させて去ろうとしていた。

「待て！」

コナンは走り去ろうとする車を必死に追いかけたが、所詮人間、しかも小学生の足で追いつくはずがなかった。

「クソッ！」

そこへ、後からコナンを追ってきた光彦、元太、哀の三人がやって

きた。

「おい、コナン！ハアッハアッ…お前、足速えよ…」

「それで、吉田さんは？」

「ああ、まんまと誘拐されちゃったぜ…」

「ええー！ど、どうするんですか！」

「…そうだ！探偵団バッチ！」

「無理よ。今あの子のバッチは博士が修理中なもの」

「…とりあえず、車のナンバーと犯人の顔は覚えているから、警察に電話しよう。」

「何か良い案思いつきましたか？」

「いや、何にも…。犯人を追跡出来るような証拠はないし、今は警察からの連絡を待つしか…」

RRR…

「電話か？誰からだ？」

「高木刑事からだ…。もしもし？」

『ああ、コナン君かい？先ほどの誘拐事件のことなんだけど…。犯行に使われた車、あれ実は盗難車だったんだ。』

「盗難車？」

『ああ。でも犯人はの目星はついてるよ。』

「え？」

『名前は五味吉郎、37歳。米花町3丁目に住んでいて、何でも最近、放課後になると近所で遊んでいる小学生の女の子に声をかけてくるらしい。みんな気持ち悪がって、逃げちゃうらしいんだけど、ついに最近ケガ人が出ちゃってね。』

「えっ…」

『小学5年生の女の子だったんだけど、五味が必要以上に話しかけてきたから逃げようとしたんだけどね、急にポケットからナイフを

取り出して、その子の腕を斬りつけたんだって。』

「……。」

『その女の子曰く、その時男は何か訳の分からないことを叫んでたらしいけど……って、コナン君、聞いている。』

「ああっ、うん、聞いているよ。」

『たった今その男を緊急指名手配したから、歩美ちゃんのことはいくつか警察に任せて、君たちはお家に帰りなさい。』

「はい」

『また何か分かったら連絡するね。それじゃっ』

「高木刑事、何だって？」

「ああ、どうやら犯人の目星はついたらしいけど…、そいつは最近、別の女の子を刃物で斬りつけて今も逃走中らしい…。まっ、俺たちが動いても警察の邪魔になるだけだし、今日はもう帰ろうぜ！ じゃーな！ お前らも気を付けて帰れよー！」

「えっ、ちょっと、コナン君!？」

「おいコナン！ 歩美のこと心配じゃねーのかよー！ こういう時の少

年探偵団だろ…って、もう居ねえし…」

「クッソ…どこに行っただよ…」

コナンは、歩美が誘拐された現場にいた。少しでも手掛かりを見つけるために…。
するとそこへ…、

「コーナーンーくーん？」

「ゲッ、なんでおめえらここに！」

「抜け駆けは、あなたの得意技なんですよ？」

「ずりーよな、お前！」

「わっ、わりいわりい…」

コナンは一人で捜査をしていたところを見つかり、苦笑いでそう返した。

R R R・・・

「また電話ですか？」

「高木刑事かな・・・もしも・・・」

電話先の声は、思いがけない人物だった。

「コナンくん助けて！」

「歩美か！？今どこだ！？」

「えっ、歩美ちゃんからですか？」

「今どこにんだよ！」

「シッ！」

光彦と元太が騒ぎ始めるのを、哀が制した。

「今、電話できるのか？」

「う、うん…。犯人のおじさんが出て行く音が聞こえたから・・・それより大変なの！」

「どうした!？」

「あのね、ここにいるの、歩美だけじゃないの。他にもね、小学生ぐらいの女の子が10人いるの。」

「なんだって!？」

「ここに来たのは今のところ、歩美が最後なんだけど…」

「で、そこ、どこだかわかるか？」

「ううん。窓がついてなくて、外もわかんない。電気もついてないし……あ、でもね、匂いがあるよ。」

「…匂い？」

「うん、多分お線香の匂いだと思う。歩美この前お母さんとお墓参り行ったから、嗅いだことあるよ。」

「…ということは、どこかの寺か…」

コナンがそう推理した時だった。

「ダメじゃないか、お嬢ちゃん。こんなことしちゃあ…」

「キャア！」

——プツッ

「おい歩美！？どうした！おい、あ…」

プープープー…

「電話、バレたの？」

「ああ、どうやらそうみてーだな…」

「ダメじゃないか、お嬢ちゃん。こんなことしちゃあ」

「キャアア！」

そう言って犯人は、歩美から携帯電話を取り上げ、自分のズボンのポケットにしまった。

「まさかこんな小さな子が持ってると思わなかったからな。」

そう言う、男は不適な笑みを浮かべて呟いた。

「もう少し、じっとしていてくれよ。そうしたらおじさんが、この花火のようにみんなに真っ黒なお花を咲かせてあげるからね……そう、黒こげのね……」

（コナン君……。歩美、信じてるからね。コナン君ならきっと、歩美のこと見つけてくれるって……。だってコナンくんは、歩美が初めて好きになった男の子だもんね！）

——1時間後。

誘拐された少女たちは、精神的に疲れ果てていた。

もちろん歩美も例外ではなかったが、それでも信じることは止めていなかった。

愛する人がやって来るのを——：

「そろそろかな。日もくれてきたし、きっとこの米花町に、美しい花が咲くだろう。まずは……、そうだな、悪い子にはお仕置きなきゃいけない。そこのお前だ。」

「えっ！？わ、わたし？」

男はそう言って、歩美を指さした。

「そう、お前だ。ごめんねえ、お嬢ちゃん。恨むんなら俺を除け者にした社会を恨むんだな。」

男は歩美に近付くと、逃げられないように肩に手を掛けた。

（コナンくん……！）

「歩美伏せろ！」

「えっ？」

その時、どこから飛んできたサッカーボールが、犯人の脳天にクリーンヒットした。

「ぐあっ……」

この衝撃に耐えられる者はいないであろう。犯人は気絶して横たわっている。歩美の目に飛び込んできたのはそんな犯人と、しぼんだサッカーボール。

「このボール…」

「歩美！大丈夫か！？」

「コナンくん…コナンくん！」

歩美はコナンの方へ駆け出し、無意識に抱きついていた。

「わっ、ちょっと、泣くなっ…」

「怖かったよぉ！」

「さっき警察呼んだから、もう安心していいぜ。」

その言葉を聞き、歩美以外の誘拐されていた少女たちも飛び跳ねて喜んだ。

「歩美ちゃん！大丈夫ですか？」

「歩美、生きてるか？」

そして最後に入ってきた灰原は、気絶した犯人に向かって毒舌を吐いた。

「全く、女の子を連れ去るなんて最低ね。変態さん？」

「光彦くん！元太くん！…それに、哀ちゃんも！」

伸びている犯人を横に、周囲は賑やかになった。いつの間にか警察も到着し、事件は無事解決した。

「コナン君！」

「ん？」

「コナン君、助けてくれてありがとう！あのねっ、歩美、コナン君が来てくれるって信じてたよ！…でも、どうしてここがわかったの？」

「ああ、簡単なことさ。格子窓が付いていないってことは、どこかの建物の地下ってこと。線香の匂いは寺かと思わせるけど、普通寺に地下なんてないし、今この時期はどこもお盆で人がいっぱいだ。そんなところに女の子が何人も車でやって来たら不信に思われないわけがない…。他にこの時期、線香のような匂いのする場所と言ったら、来週のお祭りで使用される花火の火薬が保管されている、公民館の地下しかないってわけさ。」

「へえ…。さっすがコナン君！」

「それで、犯人の目的はなんだったの？」

灰原が、現場に到着した高木に聞いた。

「ええっと、被疑者の五味には妻子がいるんだけどね、奥さんが愛想つかして、子供を連れて出て行っちゃったんだ。それが寂しくて、自分の子どもと同じくらいの年の子に声をかけてたんだけど、みんなが自分を除け者にしたと思って、犯行に走ったらしいよ。その時、怪我をして今年のお祭りの花火師から外されてしまったことが悔しくて、子供たちを花火と一緒に打ち上げようとか何とか…」

「……」

哀は、苦笑いしか出来なかった。

「コナンくん！歩美、どんな事件もへっちゃらかも！」

「へ？」

「だって、コナンくんが助けてくれるんでしょ？」

「え…」

「ちょっと、コナン君！？また抜け駆けですか！？」

「そうだぞ！おめえだけじゃねえぞ！」

「ほら、親御さんたちが心配してるでしょ？早く帰るわよ」

いつもより、騒がしくて、ちょっぴり甘酸っぱい少年探偵団の1日であった。

甘酸っぱい恋物語（後書き）

犯人の男は単なる変態でした。すいません…（笑）

事件絡みは難しいですね。コナンの推理は適当に考えたものなので、気にしないでくださいww

それにしても米花町の公民館には、地下室があるのか（笑）↑ウソです

Happy wedding ! (前書き)

だっさい名前ww

うえっ、げほっ、おほん…失礼。

WISHO2様リクエストで、
weddingの続編です。

登場人物多い！

CPは新蘭平和快青真園
です。

文字の羅列ww

明日のまじ快が楽しみすぎて、一気に書いてしまいました！
そして登場予定のなかった快斗と青子も、
途中乱入しちゃいました（笑）

Happy wedding !

「遅えなあ……」

ここは結婚式場の新郎控え室。

誰の結婚式かといえば、もちろん工藤新一と毛利：工藤蘭のだ。

新一は今、目暮警部の手伝いをしながら、探偵として日本中に名を馳せている。

新一の妻 蘭は、高校教師として働いている。部活動の顧問は、もちろん空手部だ。

自分たちを取り巻く環境が一変し忙しい毎日を送っていたが、ようやく周囲が落ち着いたこともあり、籍を入れることにしたのだ。

「おいしい工藤、来たったで！」

「よお、新一！」

「ああ、服部と黒羽か。サンキューな、わざわざこんな遠いところまで。」

「親友の結婚式にこないやつがあるかっちゅうの。」

「そうそう…、新一の晴れ舞台だもんな！」

そう言うとき快斗は、自らの手の平からポンと薔薇を出して見せた。

「ところで工藤、なんか困ったみたいやけど、どうしたん？」

「いや、蘭の支度が終わったら園子呼びに来るはずなんだけど、なかなか来なくて…とところで、和葉ちゃんと青子ちゃんは？」

「ああ、和葉ならお前の嫁のところに行ったわ」

「青子も」

「…そっか」

その時、ドアを2回、コンコンと叩く音がした。

「はい」

「新一くん、蘭の準備が出来たわよ。」

「ああ、今行く…あ、和葉ちゃんに青子ちゃん。」

「「おめでとう、工藤君。」」

「…ありがとう。」

そう答えた新一の顔が優し気で、とても幸せそうなものだったので、和葉と青子は思わず顔を赤らめた。

(…なんや、気に入らん)

(…なんか、気に入らねえ)

——自分たちの彼氏が、嫉妬しているとも知らずに。

「ほな、俺らも姉ちゃんところ行こか」

「そうだな！蘭ちゃんにも挨拶したいし！」

「アホ！あんたはこっち！」

「ほら、快斗もだよ！」

「じゃあ新一くん、また式でね。蘭のこと見て、腰抜かすんじゃないわよ！」

「なんだそりゃ」

そう言うと、新一は蘭の元へ、園子、平次、和葉、快斗、青子の五人は式の会場へと分かれていった。

「蘭ちゃん綺麗やったなあ」

「ほんと、新一くんにはもったいないわね！」

「あーあ、まだなのはあたしだけやん…」

「あら、私もまだ真さんからは、正式な話はされてないわよ。」

「青子もまだだよ！だってバ快斗、何にも言ってくれないし…」

そう言うと、和葉と園子と青子は、横目でジッとその人物を睨みつけた。

「なっ、なんや…」

「何なんだよ、青子まで！」

「べえつにいく。何でもありません〜ん」

「自分らで考えたらええんとちゃうの？」

「なっ、なんやそれ」

「意味分かんねえし！」

二人とも、彼女が自分たちに圧力をかけてくる原因はわかっていたが、内心愚痴をこぼした。

(……アホオ…言うタイミングがわからんのや…)

(……バーロ、タイミングが掴めねえんだよ)

そう心の中で呟くと、平次と快斗は肩身狭そうに女性三人の後について会場に入っていた。

”コンコン”

「はい、園子？」

”コンコン”

「誰？」

ガチャツとドアが開く音がすると、向かい合わせとなった二人の顔は、みるみる紅くなっていった。

「新一……」

「よっ、よお……。園子に呼ばれて来たんだけど……」

それだけ言うと、新一は蘭を見つめたまま固まって、暫く動けなくなってしまった。

「なによ……、何か言いたそうね」

「あっ、いや、その……き、綺麗だなあって思って。」

「え？」

「えと……、絵本に出てくるお姫様みたいで、びっくりした。」

「なによそれ、気障〜」

そんなイヤミを良いながらも、嬉しさと動揺を隠せない蘭。

「な、なんか、高校の時の文化祭を思い出すな。」

「ミスコン…懐かしいね」

「ああ。あの頃の夢がようやく叶えられて、ホッとしてるよ。」

「夢って？」

新一は一瞬下を向き、頭を掻くと、恥ずかしそうに言った。

「俺が…、俺が蘭にウエディングドレスを着せるっていう夢」

「…新一……」

「すっげえ似合ってるよ、蘭。俺、蘭に出逢えて本当に良かったよ。」

「…私も。新一に出逢えて、良かった。」

「…さっ、そろそろ行こうぜ。」

「うん！」

式はまず、小五郎と蘭がヴァージンロードを歩くところから始まった。

小五郎は初めから涙を堪こらえていた。

蘭を自分の腕から、新郎の元に離すとき、小五郎は言った。

「おい、新一！蘭のこと、頼んだからな。お前だから許してやったんだぞ！蘭を泣かせるようなことしたら、承知しねえからな！」

「…はい！」

その瞬間小五郎は泣き出し、それを最愛の妻である英理に慰めてもらった。

誓いのキスはとても神聖で美しく、誰もが見とれていた。その後は平次や快斗、高校時代の同級生たちが口笛を吹いたりして、はやし立てた。

蘭から両親への手紙は、小五郎だけではなく、英理も涙を流した。

娘からの最後のお願いとして、いつまでも二人仲良く、というのは、守らずにはいられなかった。

式には警察関係者も多くいたが、終始和やかな雰囲気に進んでいた。

最後のブーケトスには多くの女性が、自分の幸せを掴み取るために参加した。

「なんか楽しみやね！」

「うん、うん！」

「はあ、私も真さんと早く結ばれたいわあ……」

「それじゃあ、いっくよー！そーれっ……あ！」それは、誰もが予想しなかった光景だった。

勢いよく宙に舞ったブーケは固定していたひもが外れ、束ねていた花々が周囲に飛び散ろうとしていた。

「ああっ…」

蘭はその瞬間、”しまった”と思った。

「……と、とってしもーた」

「…私も」

「あ、青子も…」

宙ではどけた花束は綺麗に三つに分かれ、それぞれ和葉、園子、青子の手中へと吸い込まれていった。

「こ、これで、良かったのか…な？」

「…だな。」

一瞬自分の失敗に冷や汗を浮かべた蘭だったが、無事自らの知り合

いのもとへ渡ったことにことに安堵した。式も終わり、それぞれが家路に着こうとしていた。

「蘭ちゃん、綺麗だったね！」

「そうだな」

「それに、とっても幸せそうだったね！」

「そうだな」

なんの変哲もない返答に、青子はまるで子供のようにぷくっとなんを膨らませた。

「……。」

「…なんだよ！言いたいことあるなら言えっつーの！」

「べっつにー！青子は話があるんじゃないかって、話を聞きたいだけだもん！」

「……。」

「快斗？」

快斗と呼ばれた少年は、道端で立ち止まると隣にいた女性の方に振

り向き、自信満々に言った。

「お嬢さん、黒羽快斗のスペシャルマジックショーへようこそ！ 今宵は今まで誰にも見せたことのない、最初で最後のマジックをお見せいたしましょう。」

「…なによ、それ」

クスッと笑って、彼女は呟いた。

「ではまず、私の手をご覧ください。手の平には何もあります。が…」

快斗は差し出した右手をポケットに入れ、何かを握って、それを青子の前に開いて見せた。

「あら不思議！ こんなところに指輪があゝ…」

「快斗…：それ全然、マジックじゃないよ。」

「え」

クスッと笑うと、青子はありがとう と言ってそれを左手の薬指に はめ、手を目線と同じ高さに持ってきて、それを眺めた。

「きれい！」

それは月夜の明かりに照らされ、より一層輝いて見えたのだった。

「真さん、試合どうだった？」

今日は新一と蘭の結婚式だったというのに、最愛の彼氏 京極真は、海外の試合に出掛けていた。

「ええ、もちろん勝ちましたよ。優勝トロフィーと一緒に、日本にいるあなたの元へ持って帰ります。」

「そっか、よかったあ…。今日ね、蘭、すごく綺麗でね、とっても幸せそうだったの」

「…そう、ですか…。行けなくて、本当に残念です。」

「その時ブーケトスで偶然ゲットしちゃったんだけど……ねえ、真さん。私たちもそろそろ…」

「あっ、ちよっ、ちよっと待ってください園子さん!…その続きは、日本に帰ってから私の口で直接言いたいので…。」

「…はい。」

自分の本当の幸せを掴み取るのも、そう遠くはないのではと感じ始める園子であった。

「あーあ、ほんま蘭ちゃん綺麗やったなあ…」

「さやか。」

「もう!本当に鈍感なやつやなあ!工藤君見習って欲しいわあ!」

「……。」

親友の肩を持つ彼女にムツとしながらも、平次は口を開いた。

「なあ、和葉。ちよっとしたゲームせえへん?」

「ゲーム？」

「コイン当てゲームや。当たったらくれたるで」

「ほんまに!？」

「ああ！」

「ちなみに、いくら? 100円? 500円?」

「アホ! そんなんよりずっと高額や！」

「えゝ、本気で挑まんとなあ！」

「ほな、いくで！」

“♪ドンドン、どっちの手に入ってるかゝ”

「うーん、こっち…? いや、こっちやろか…」

「早せえ」

「うんと、じゃあこっち！」

和葉は、平次の右手の拳を指指した。

「決まりな！」

そう言うのと、平次は待っていたかのように、固く結んでいたその拳を解いた。

「当たり前。」

「へ?」

彼女の視界に映ったのは指輪。それも、大きな宝石がついたものだった。

「人から貰^{もら}ったモンは、きちんとつけなきゃアカンで。」

そう言うのと平次は、和葉の左手の薬指を指差した。

「平次……」

「本当は、いつ言おうか迷ったん。1ヶ月も前から準備してたんやけど…、なんやタイミングわからなくてなあ。」

「ありがとう、平次。」「お、おう!」

幸せは人から人へ渡っていくものなのかもしれない。
自分が受け取った幸せは、また別の人へ――…

そう考える、一同であった。

Happy wedding ! (後書き)

えっと、平次と和葉のやつは、昔好きだった漫画から少し引用させていただきました。

ていうか、“♪ドンドンどっちの手に入ってるか” ってやつ、小さい頃から私の地域ではあったのですが、全国的なのかなあ(笑)？

そういえば、この作品がいつの間にかランキング入りしてまして、アクセス数も嬉しい限りです。
ありがとうございます！

せっかくリクエスト頂いたのに断るのもアレなんで言いますと、私は原作に忠実に生きる、人間なので、新志、コ哀、平蘭等のご期待にそえない文面が仕上がりますので、お断りさせていただきます。
申し訳ありません。

でも、リクエストは随時受付中です。
感想などもいただけると、もれなく作者が泣いて喜びますよ。

I know. . . (前書き)

こんにちは。

今回のお話はルーシー様リクエストで、

平次×和葉です。

ルーシー様ありがとうございますO(^O^)
O

それでは、どうぞ

I know...

「おっそいわあ…」

コンビニの前に停めた自分のバイクに寄りかかりながらそう洩らした少年は、大欠伸を一つ落とした。

「あいつ、いつまで買ってんねん…」

ポツリと呟いたところで、自分を待たせている張本人が、何やら大きな袋を抱えて自分の方へ走って来たのを見つける。

「ごめん平次く！ちょっと色々買いすぎて…」

「なんやねん、その大荷物。」

「ごめんごめん、ジュースとかお菓子とか、色々選んでたらえらい

時間かかってしまうて…」

堪忍な、と言って息を切らしている彼女が抱えているジュースやお菓子やらが大量に詰められたそれを、ひよい、と自分の手元に移し替えると、彼女は素直にお礼の言葉を口にした。

——ここは京都。

依頼人に会うためここへやって来たのだが、彼女が平次のバイクの後ろに乗って付いて来るのは、いつものことだった。
平次はそれもまた、いつものように受け流す。

依頼されていた事件はすぐに解決した

——というより、父親に依頼された　と言っても良かったかもしれない。

詳しいことは聞かされず、多忙な父親の代わりに事件の依頼を受けに行くのかと思っていたが、その期待はあっさりと打ち切られた。

「…ったく、わざわざ京都まで来ておつかい、かい。」

それは、以前父親が担当した事件の被害者のところへ、彼の父親への感謝の粗品を受け取りに行く　というものだった。

多忙なため伺うことができず、かと言ってせっかくのご好意を断るわけにもいかないので自分の代わりに依頼人に会ってくれと言って、平次を京都に寄越した。

しかし、息子はそんな理由では引き受けてくれないだろうと判断した父は、少しばかり話を大袈裟にして頼んだのだった。

「あのクソ親父、俺を騙しよったな…！」

一人苛立ちを隠せないでいる平次をよそに、和葉はどこか嬉しそうだった。おそらく、彼と二人で出掛けることができて嬉しいのだろう。

ここのお互い多忙で、学校でもあまり話せていなかった。事件も事件ではなかったので、今日は久々にのんびりできそうだ。

「なあ平次、せっかく京都に来たんやし、ちょっとお花見して行こうや！」

和葉の提案に初めは乗り気ではなかったものの、彼女に強く説得され渋々承諾した。

それなら何か食べ物を買ってくると言って和葉が去ってから約15

分。
やっと戻ってきた彼女に不満を感じながら、それを口にはしなかった。

そして、今に至るのだ。

「どこ行こうか。ここからなら京都御苑が一番近いかなあ…」

携帯電話の地図機能で色々検索をしながら呟く彼女を見て、平次は何かを思い出したかのように言った。

「…ほんなら、ちょっと行きたいところあるんやけど…、ええか？」

「平次が言うんならええけど、どこ行くん？」

「内緒や。着いてからの楽しみ…ってことで！ほな、早よ行くで！」

そういうと、平次は和葉にヘルメットを投げた。
和葉専用のそれは、いつも平次のそばにいる彼女限定の代物だ。

後ろに和葉を乗せ、ブレーキのところには先ほど彼女が買ってきた大きなビニール袋を下げて、車体を走らせる。

座席下の空間はすでに物が詰められて、買ってきた袋を入れられる余裕は残っていなかったからだ。

チラチラと視界に入ってくるその不釣り合いな絵に、まるでスーパーの特売日に買いだめしたオバチャンやな、と大阪人らしい例えをして、運転に集中した。

「はいは——…」

バイクから降りた和葉の視界に映ったその場所は、以前に二度、彼女自身が訪れたことのある場所だった。

「山能寺や。……やっぱええなあ、ここ…」

そこは特別広くはなく、綺麗という訳でもなかったが、庭の中央にそびえ立つ立派なソメイヨシノが人々の心を安心させる。最も、今ここでその桜を見ているのは平次と和葉の二人組の高校生だけだったが。

「久しぶりやなあ、ここ。丁度一年ぶりくらいやろか。」

「ああ。あの義経紛いの犯人とやり合って以来やな。」

2人はソメイヨシノの木を見上げながら、感傷に浸っていた。

「おや、大阪の探偵さんやないですか。その折は大変お世話になりました。」

二人に向かって声を掛けてきたのはこの寺の住職の円海だった。

「ああ、久しぶりやな。元氣しとったか？」

他愛のない世間話を一言二言話 話した後、円海は寺の縁側を指差して言った。

「お花見やったらあそこが特等席ですわ。どうぞ腰掛けてゆっくり
していって下さい。」

「平次、折角やからお言葉に甘えさせてもらおうよ。」

「せやな。」

そう言うのと円海は、ゆっくりとお辞儀をして去っていった。

辺りは再び、静かな空気に包まれた。

それは二人にとって、世界にはまるで、自分たちしか居ないかのよ
うに感じられた。

「ほんま、綺麗やなあ…」

「ん？」

「…アンタ、折角来たのに花より団子、かいな。」

呆れ顔の和葉の目に映ったのは、紙コップ片手にスナック菓子に食

らいつく平次の姿だった。

「…しゃあないやん、腹減ってんねんから。」

ジュースを一気飲みし、まるでオヤジのように振る舞う平次に、和葉は思い出したように訊ねた。

「そういえば平次、京都に来たら初恋の人探さなくてええんか？」

平次は、和葉の質問に一瞬目を見開くと、指についたスナック菓子のカスをペロッと舐めて口を開いた。

「あー、それな、もうええねん。」

「え？」

「せやから、ええねん、もう。」

「何でなん？…もしかして、ほんまに見つかったんか？」

「…ああ。」

和葉は一瞬、この先を聞いて良いものかと躊躇ったが、意を決して訊ねた。

「ど、どんな人やったん？その、初恋の人って」

「んー…」

平次は考えるようにして、その言葉の続きを口にした。

「なんか、やかましいやつやった」

「やかましい〜？」

頭上にクエスチョンマークが浮かんでいる和葉に向かって平次はニッと笑うと、意地悪く言った。

「まだや、まだ！せやなあ…、あと1万年ぐらい経ったら教えてやつてもええで！」

「なんやケチ！アンタこの前は1500年ってゆうてたやんけ」

平次はゆっくりと立ち上がると、当然のごとく反抗してきた和葉の頭を優しく撫でて、呟いた。

「…まあ、それまで俺以外、誰も近づけんやないで。」

「…なんや、全っ然意味分からん!」

「今はまだ、分からんでええ」

停めてあったバイクに向かう平次を見て、和葉は慌てて歸りの支度をし、彼を追った。

全てを知っているのは
この桜の木。

彼女が真実を知るのは、

1万年後

——いや、そう遠くはないのかもしれない

そして、彼らと再び、
ここで会う日も――…

I know... (後書き)

平次には告白させず、あえてこういう形で終わらせていただきました。ご了承ください。

えっと、私情で大変申し訳ないのですが、更新のペースを少し下げさせていただくことにしました。連載中の小説はこれだけです…。目標は週に1回くらいで。もちろん、リクエスト頂いたものは喜んで書かせていただきます。

なんか、たくさんの方に見ていただけるのは大変嬉しいのですが、完全に自己満で書いている小説なので、読んでくれている方全員が満足のいくような作品は書けないと思います。

そんなんで良いのかな――…と思うんですが…
完全に受験でネガティブですね(笑)。
本当に早く終わって欲しいですww

えっと、未熟者ですので納得のいかない部分も多々あるかと思いますが、多目に見てやってもらえると嬉しいです。
ご指摘頂ける場合は、具体的に書いてもらえると助かります。

それでは、また、(^^)

小さな探偵とキザな怪盗（前書き）

お気付きの方もいるかと思いますが、やっと仮タイトルを変えました。

そのまんまですが、ミックスジュースのように色々な要素を詰め込みたいという意味です。

さて、今回は探偵くんと怪盗のお話です。
珍しく恋愛要素はナシです。

アニメの怪盗キッド祭りも後半ですね。
それに乗っかってみました（笑）

小さな探偵とキザな怪盗

「…たくよお、何なんだよ、この人混みは。」

コナンは、溜め息混じりにそう呟いた。

今日は自分のご最良のプロサッカーチーム、“東京スピリッツ”の試合を観戦しに、はるばる電車を乗り継いでやって来たのである。

商店街のくじ引きで、またしても蘭が強運を発揮し、見事にチケットを当てた。

商店街の主催者側は、

券は用意できる分は用意する　と言ってくれたので、そのご厚意に甘えてかなりの人数分を手配してもらった。

サッカー好きのコナンはもちろん、その友達の少年探偵団、彼らの保護者的存在である阿笠博士、そして自分を含む7人分だ。

「もう、お父さんも来れば良かったのにね。こんなに良い試合、もう二度と見られないんだから！」

父親である眠りの小五郎こと毛利小五郎は、サッカーより麻雀の方が良いと言って、付いては来なかった。

代わりに親友である鈴木財閥令嬢、鈴木園子を誘ったのだが、今夜は大事なパーティーがあるらしい。

こういうところだけはお金持ちのお嬢様っぽいなと、コナンは内心毒付いた。

そんな今は、試合が終了し駅に向かっていている途中。

その集団は主に2色に分かれていて、白い服を着た者は少し興奮した様子で、黄色い服を着た者は残念そうに肩を落として駅までの道のりを歩いている。

試合は白熱するものだった。

前半は相手チーム、ビッグ大阪のエース比護が1点を決めてリード。

その瞬間、自分の隣にいた灰原の口元が弛んだのを、コナンは見逃さなかった。

後半35分、それまで防戦一方だった東京スピリッツ側がゴールを決め、そして延長48分、東京スピリッツのヒデこと、赤木英雄が

ゴールを決めて試合は終了した。

「にしても、すっげー人だな！」

「これじゃあ駅まで30分以上かかるかもしれませんね。」

通常、スタジアムは駅から直結で、徒歩5分だ。

しかしこの人混みでは容易ではないようだ。

その瞬間、後ろの方からドドドドツというけたたましい音と共に、いくつかの悲鳴が聞こえてきた。そして、人々はドミノ倒しのように流れ込む。

「いってー…。何なんだよ、もう。」

コナンは、転げた体を即座に立ち直し、汚れの付いたデニムをパンパンと叩く。

刹那。彼はさっきまでポケットに入っていた、あるものがないことに気付いた。

「あれっ、蝶ネクタイ型変声機がねえ…」

身体中のあらゆる場所を叩いてみたが、その形の膨らみは感じられなかった。

おまけに、さっきまで行動を共にしていた蘭たちの姿も見えない。

「こりゃ完全に離れたな。」

少年は溜め息をつくど、まずは無くしたそれを探し始めた。

阿笠博士が自分のために作ってくれたそれを簡単に手放すのには気が引けたし、

何よりそれが、第三者の手に渡るのを防がなければならない。

“ただの蝶ネクタイ”と呼ぶのには少し躊躇するそれを他人が見つけたら、面倒なことになるのは目に見えていた。

深い深い溜め息をつきながら何かを探す仕草のコナンの背後に、ある一人の人物が話しかけてきた。

「おい坊主、何か探してんのか？この黒羽快斗様が一緒に……ひっ
！！」

「え？」

不意に声を掛けられて振り返ると、高校生くらいの青年が、振り返る自分を見て何やらまずそうな顔をしている。

「あ、いや…何か落としたんなら、一緒に探してやってもいいかなーと思って…」

(…やっべー……まさかあの探偵くんがこんなところにいたなんて…。)

「お兄ちゃん、誰？」

「え？ ああ…、俺は…そう！ ただのマジシャンさ」

黒羽快斗と名乗った少年の手の平には、いつの間にか小さなボールが1つ乗せてあり、それを手を握る度に2個、3個、4個と増やしていく。

コナンはその人物の顔を見て、なんだか誰かに似ているような気がしてならなかった。

無論それが、小さくなる前の自分にそっくりだとは気付かない。

「へー、すごいんだね、お兄ちゃん！」

「あ、ああ、まあな。…んで、坊主は何を探してたんだ？」

ここで何も言わないのも怪しまれるであろうと判断したコナンは、正直に探している物の名を言った。

「んっとねー、赤い蝶ネクタイなんだけど…なんかもう、いいみたい！」

「あー、あれかあ…。」

青年は、度々彼と対峙する時に、彼がいつも身に付けているそれを感じ出して無意識に声に出していた。

「え、知ってるの？」

「あ、い、いや！何でもねえ。それよか早く見つけちまおうぜ！人の流れもだいぶスムーズになってきたみたいだし。」

見渡すと、さっきまでごった返していた人々の群れは少し緩和され始めているようだった。

「う、うん。」

――数分後。

「あつた！これじゃねえか？」

最初にそれを見つけたのは、高校生らしきの青年の方だった。彼はその蝶ネクタイの裏面を見て何やらいじくっている。

「あの人混みの中で落として、誰かに蹴られたんだな。運良く人混みから離れて、道路の脇に辿り着いたってわけか。まあ、踏み潰されなかっただけでもありがたいと思うんだな。はいよ、坊主。もう落とすんじゃないよ。」

「……うん、ありがとう！」

いつの間にかあんなにたくさんいた人々は消え、数百メートル先の駅の前で、蘭たちが手を振ってこちらに向かって叫んでるのが見えた。

「じゃあな、坊主！」

「うん、ありがとう快斗兄ちゃん。…………いや、怪盗キッドって呼んだ方がいいかな？」

コナンは、その青年の顔が一瞬引きつるのを見逃さなかった。

「…………な、何言ってるんだよ坊主。俺がキッドなわけねーだろ。」

コナンは自信あり気に、座右の銘である“ポーカーフェイス”を忘れ、明らかに動揺している青年に向かって、自分の推理を披露した。

「考えてみりゃ変じゃねーか。この蝶ネクタイ型変声機の裏を見ていじくってたのに、それを俺に問いかけてこないのは。これは何だ、ってね。普通の人なら尚更だ。」

「…………」

「それにお前、俺に声をかけてきたときあからさまに嫌な顔してたし、マジックをするやつで俺のことを毛嫌いするやつは、俺の知ってる奴で一人しかいない。」

「それだけでか？」

「それにお前が先日予告状として指摘してきた場所。警察はまだその場所を特定出来てねえが、今わかったよ。」

“紅白の旗が行き交う中、静寂を知らせる音が鳴り響くその瞬間、ビッグジュエルを手中に収めに参ります。” っていう予告状。

紅白っていうのは来週行われるガンバ東北対東京スピリッツのチームカラー。旗はそれぞれのユニフォームを着た観客たち。それが行き交うっていうのは、試合が始まる前か終わった後、各チームカラーを着た観客がスタジアム周辺に集まって、今日のように人混みで溢れかえること。

静寂を知らせる音は、試合終了のホイッスルのこと。人混みに紛れて逃げるのがお前のやり方だから、試合が終わってスタジアムから人が出てくる時が、お前の予告時間になるってわけさ。」

「ほおー？」

「まあ、そこまで推理すれば、目当ての宝石は、スタジアムに隣接する美術館に展示されている、月の恵みってやつだろうと容易に予測できるしな。」

だからお前が、当日と同じように人で溢れ返る今日に下見に来てもおかしくはないと思ってよ。」

「…へえ、さすがは名探偵。んで、どうする？ 本名を名乗った俺を、

警察に突き出すか？」

「え、あれ、本名だったのか？」

「……ったりめーだろ！そこまで工作してる余裕ねえつつうの！お前に声掛けたのも偶然だし！」

「まあ、今回は見逃してやるよ。そんな姿の怪盗キッドを捕まえても、なんか拍子抜けしちまうし。」

「……ほっとけ。」

「それに、お前は俺の正体を知っているのに俺はお前の事を何も知らなかった。

ちよっと不公平だと思ってたけど、お前の素顔を知った今、お前が俺の正体を誰にも言っていないのなら、それでおあいこだ。

お前のその仮面を剥ぎ取るのは、白いキザなコソドロの姿で、俺の目の前に現れた時まで取っというてやるよ。……黒羽快斗くん？」

快斗は「うっ！」と一瞬引きつった顔をしたが、言葉を続けた。

「……ふっ。そりゃありがたいんだか、恐ろしいんだかわかんねえな。

……じゃあな、名探偵。
またどこかで、お会いしましょう。」

その瞬間、ボンっという鈍い音と同時に、目の前にいた本職の高校生
の姿も消えていた。

コナンは自分だけが知った彼の本性に、少しだけ頬を緩ませながら、
自分に向かって手を振っている者たちの元へ走って行くのだった。

小さな探偵とキザな怪盗（後書き）

このお話はコナンとキッドにこんな絡みがあったら面白いかなーと思って書いた作品です。

サッカーのくだりは多めに見てやって下さい（笑）

あんな予告状でも考えるの大変でした。

歩美ちゃんのお話の時もでしたが、やっぱり推理系は難しいですね。

ゴーショー先生、本当に尊敬しますm（　　）m

I l o v e y o u ? (前書き)

W I S H O 2さまリクエストで

第1話「C h r i s t m a s !」の番外編（続き）のお話です。

W I S H O 2様、ありがとうございます（＾Ｏ＾）

カップリングは一応新蘭です。

新一未登場ですが（汗）

I l o v e y o u ?

「~~~~♪」

蘭が、機嫌良さそうに鼻歌を歌い初めてから、もう10分。
洋服を取り出してきては鏡の前を行ったり来たりしていて、とても
慌ただしい様子だ。

今日は、長らく事件で不在だった新一が帰ってきてから初めて二人
きりで出掛ける日だった。

世間では、それをデートと言う。

「どれが良いかなあ〜…」

蘭はこれから会う人物の顔を思い浮かべながら、またもやクローゼ

ットから服を引っ張り出して、自分の身体に当てていた。

30分後。

ようやく着る服が決まったのか、淡いピンク色のワンピースに薄いデニム地の上着を羽織り、鏡の前でクルリと一回転してみた。無論、周囲には誰もいない。

そうしている間に、刻々と約束の時間は迫って来たのだろう。

ふと壁に掛かっている時計に目をやると、家を出る予定の時間の丁度5分前だった。

「いけない！もうこんな時間！」

慌ててバックを肩に掛け部屋を出ようとしたとき、彼女の頭にある一つのものが浮かんた。

「あっ、そうだ。折角だから、アレ付けていこうかな。」

蘭は机の引き出しの一番奥で大切に保管されている一つの箱を取り出した。

一番初めに見せるのは贈り主の前で、と決めていたので、時が来る

までそれは光を浴びることはなかった。

チェーンを自分の目線の高さまで持ってくると、彼女はそこで初めて、ペンダントに何か文字が刻まれていることに気が付いた。

「え、これって――…」

そこには“R”と“S”の二つのイニシャルに加えて、ひとつの愛の言葉が。

それが誰のことを示しているかは、一目瞭然だった。

――ガラにもないことしちゃって。

そう心の中で呟くと、
蘭はさっきよりさらに機嫌良さそうに、部屋のドアを開いたのだった。

その言葉を直接、
彼の口から聞くのは
それから数時間後のこと。

I l o v e y o u ? (後書き)

ツイッター、今までは好きな芸能人さんのを見る専門だったので、色々情報交換出来たらいいなあと思って、ちよくちよくつぶやき始めました(笑)

内容は主に漫画、アニメ、勉強関連だと思いますが、良かったらユーザー情報からフォローしてやってください(^^)

You love me! (前書き)

えっと、リクエストがありまして、前作「I love you?」の続きです。

多分このシリーズはこれで最後です。

過去話を呼んでいない方は、

「Christmas!」↓「I love you?」↓「You love me! (コレ)」

の順で読んでいただけたらわかりやすいと思います。

なんか話が飛び飛びになってしまつて、すみません(・ω・)

You love me!

二人のデートの行き先は
トロピカルランド。

提案したのは、意外にも新一の方だった。

その理由は、
自分が経験した全てを、
蘭にも見て欲しいから
というものだった。

蘭は、
行けばまた、新一を連れて行かれそうで怖い
という理由から、初めは行くのを躊躇っていたものの、新一の言葉を
聞いて承諾した。

夜になり、平日ということで人影も減ってきた中、
二人は 新一が薬を飲み
身体を締められ、“江戸川コナン”という架空の人物を生み出した
まさにその場所にいた。

「ここが新一の、第二の人生の始まりなのね。」

「じゃあ、俺は今、第三の人生を絶賛満喫中ってわけか？」

二人は冗談を言い、笑いあった。

しかし新一には、この光景が不思議でなかった。

今まで何度も自分の正体を疑われ、その度に自分も正体を明かそうとした。

本当のことを言えば、蘭をどれだけ楽にさせてやれるだろう、そして自分自身が、どれだけ楽になるだろう　と。

しかしそれは、自分の愛するものを守るためには犯してはならない大事な決意。

新一はそれを守り、貫き通した。その結果組織を倒すことに成功し、蘭にも本当のことを話し、今に至るわけだが――：

その夢に描いていた光景を目の前に、新一は実感が湧かないでいた。ただ一つわかるのは、自分は今、とても幸せだということ――

「トロピカルランドに来るのは、私が記憶喪失になった時以来だね。」

感慨にふけていた新一に、蘭が声をかけてきた。

「え？ ああ、そうだな…。全く、お前の記憶が戻らなかったらって、本気で心配したんだぜ？」

新一はジト目で、優しく蘭を睨みつけた。

「ふふふっ、あの時の新一、かっこよかったよ？」

蘭はコナンの姿の新一が、自分に対して告白した時のことを思い出して、恥ずかしそうに笑った。

あの時は自分の記憶を思い出させようと、父のプロポーズの言葉をコナンが口にしたのだと思っていたが、コナンⅡ新一と知った今、それは新一本人の言葉ではなかったのか、そうであれば良いな と、蘭は思っていた。

新一はバーロ と小さく呟くと、紅い頬を隠すため、そっぽを向いた。

同時に左腕にはめた腕時計に目をやると、自分の計画していた時間が刻々と近付いていることに気付いた。

「おっと、もうこんな時間か…。走るぞ、蘭」

「え、ちよつ、ちよつと、新一く！」

新一は蘭の腕を掴むと、

ヒールを履いている蘭が疲れない程度の速さで走り出した。

「ジャスト9時 1分前！」

「……」

そこは噴水広場。

トロピカルランドの中でも人気スポットだが、自分が見つけたその噴水特有の秘密の空間は、まだそこまで世間には浸透していない。

一番有意義な使い方をしているのは自分じゃないかとさえ考え、新一は自分で自分を称えた。

「新一とまたここに来て、嬉しい。」

「…俺も。」

蘭の方に目を向けると、彼女の胸元に何か光るものを見つけた。
見覚えのあるそれを、新一は必死に自分の頭の奥底の記憶から引っ張り出す。

「蘭、そのネックレス…」

それは、過去に自分が蘭に贈ったものだ。なかなか会えずに心配をかけている彼女に、一つの愛のメッセージを添えて。
奇しくも蘭がそれに気付いたのは、今朝方のことだったのだが…。

「あ、これ？ 新一が贈ってくれたものだ。可愛くて、とっても気に入っちゃった。ありがとう。…それに、」

「それに？」

「それに…直接じゃないけど、新一から、一番知りたかったことも知れたし！」

そう言って蘭はペンダントの裏の部分を、新一に見せるように親指と人差し指で持った。

頬を赤らめて優しく笑いかける蘭につられて、新一も自らの頬が紅くなるのを感じた。

自分たちを囲む噴水が、
二人だけの時間と空間を作り始める。

「……蘭、いつも俺のことを想っていてくれて、本当にありがとう。
コナンの姿になっちまっても俺のことを待っていてくれて、蘭には
言葉じゃ表しきれないくらい感謝してる。」

「新一……」

二人を包む空気が
張り詰め始めた。

しかしそれは嫌なものではないということを、お互いに感じ取っていた。

「愛してるよ、蘭。この地球上の……、誰よりも」

返事をする間もなく、二人は唇を交わしあった。

噴水と空に浮かぶ星空だけが、二人を祝福しながら…

You love me! (後書き)

キスするとは、なんてハレンチな、(＊、㍈)ノ(笑)

そういえば、私の小説にはキスシーン少ないですね。
単に苦手なだけです、はい。

でも、これから徐々に増やしていけたらいいなと思いますO(＾ー
＾)O

次回は大人志保ちゃんと、少年探偵団のほのぼの系で。
リクエストにも頂いた快青も書いていけたらと思います。

感想・リクエスト等お待ちしております(＾ー
＾)

c o m e b a c k 全編（前書き）

少し間が空いてしまいました。皆様いかがお過ごしでしょうか？

新学期が始まり、学校も予備校も慌ただしくなり始めています。
全国の受験生のみなさん、頑張りましょう、（ー！、ー）ノ

T w i t t e rの方はちよくちよく呟いてますので、良かったら見てみて下さい☆

宮野志保は緊張していた。

再びこの街に戻ってくるとは、思ってもみなかったから。

謎の組織が壊滅してから7年。

志保は科学者として、その名を馳せていた。

以前住んでいた場所からは遠く離れ、それまで関係を持った人間たちとも、深く交流があるわけでもなかった。

現在は結婚し、子供も産み最近までは育児休暇を取っていた。

まさか自分が所帯を持つとは思っても見なかった。

彼女もようやく人間らしい幸せを手に入れ、このままひっそりと暮らそうかと思っていたところだった。

彼女に、転勤の知らせが届いたのだ。

場所は東京、米花町。

新たに住むには知りすぎている場所だった。

——米花町、工藤邸

PRRR・・・

「…はい、工藤探偵事務所です。」

「工藤くん？私…」

「灰原か！？久しぶりだなー！」

「あのねえ、その“灰原”っていうの、いい加減止めてくれない。」

「わりいわりい、どうも慣れなくて…」

志保が転勤する前にまず連絡を取った相手は、工藤新一だった。

彼もまた結婚し、現在は立派な二子の父親である。

そして自宅兼事務所で探偵業を行っていた。
その活躍ぶりは、普段あまりテレビを見ない志保でも、嫌でも耳に入ってくるほどだった。

「んで、何か用か？お前が連絡してくるなんて、珍しいじゃん」

「ええ、今度そっちに転勤する事になってね。米花町にある研究所のチームに入れてもらうことになったのよ。」

「ふーん。お前も忙しそうだな。」

「あなたほどじゃないわ。…そうそう、博士は元気かしら？」

「ああ、最近少し血圧が上がったって言ってたけど、なんとかやってるよ。最近はようやく自炊も人並みに出来るようになったらしいぜ。」

そういえば、なんかの発明で特許を取って一躍時の人になったみたいだけど…」

「知ってるわ、散々テレビでやっていたから。それより博士には次会ったときカロリー制限のレシピをプレゼントしてあげなきゃ」

「ははは…」

新一は、随分変わったな　と、内心安堵していた。

同じ小学生として過ごしていた時と根本的な所は変わっていないのだが、雰囲気というか何というか、何かがプラスの方向に変わって

いるのを感じた。

新一の脳裏には電話越しでも、幸せそうな志保の顔が浮かんた。

一方志保は、元の姿になり、この街を去ってからずっと、心残りとなっていたものがあつた。

それは約1年間を共に過ごした、少年たちの事。

灰原哀から宮野志保へと戻った時、彼女は彼らの元を、何告げずに去っていった。

ただ一つ、彼ら宛に封筒付きの手紙を残して。

「…あの子たちは、元気かしら？」

「ああ、光彦たちのことか？中学生になった今でも、一緒につるんでるみたいだぜ？」

新一は知っていた。

彼らが今も、二人の抜けてしまった仲間の帰りを待っていることを。

しかし彼らもまた、それは叶わないことだと知っていた。

実は先日、新一は彼らに江戸川コナンの正体を打ち明けたのだった。

新一は彼らに、今までの経緯を話した時のことを思い出した――

「――…というわけなんだけど……、今まで黙ってて本当に悪かったな。」

三人はそれぞれ、何か考える仕草をして暫く動かなかった。恐らく新一の言った言葉を理解するのに必死なのだろう。

その沈黙を最初に破ったのは、歩美だった。

「…やっぱり、そうじゃないかと思ってたのよね！ね、光彦くん、元太くん。」

「え、ええ、僕らの推理は少なからず、当たっていたわけですね。」

「さすが俺ら　って感じだぜ！」

「え？」

新一は、目を丸くして聞き返した。

「この7年間、僕たちなりに色々考えてみたんですよ。コナンくんたちが突然居なくなった理由を。その結果、コナンくん〓新一さんという答えにたどり着いたんです。」

「そっか…、お前らにもバレバレだったってわけか。」

「俺ら、新一兄ちゃんから何か言ってくれるまで、待とう　ってことになったんだぜ」

「それに、私にはおいでそうじゃないかって思ったの。」

「匂い？」

歩美の発言に、新一はまたもや目を丸くした。

「うん。洋服とかの匂いじゃなくて…、新一お兄さんの温かさとか、優しさとか、そういうにおいが、コナンと一緒にだなんて思ってたの！」

「そっか…。」

彼女らしい考え方に、新一は思わず頬を緩めた。

しかし新一は、志保のことについては、彼らに何も言及しなかった。それは志保の口から、直接伝えるべきだと思っていたから。自分がそうだったように：

そんな矢先にかかってきたのが、志保からの電話だった。

「あなた、あの子たちにもバレバレだったのね…」

「ははは…。あ、あいつらには、今でもたまに俺の事件を手伝ってもらっててよ。結構仕込まれてんだぜ。さすが俺って感じ？」

「はいはい。」

志保の冷たい返答に新一は慌てて突っ込みを入れたが、相手にしてもらえなかったようだ。

そういうところは変わってないんだな　と、新一は内心毒付く。

「んで、お前はどうするんだ？」

「え？」

思ってもみなかった言葉を口に出され、志保は動揺した。

「…あいつらに、会わねえのか？」

それは、志保自身も数年に渡って悩んでいる問題だった。

彼らと会うことは、志保なりのけじめでもあった。

約1年という人生でも短い期間ではあったが、

彼らと過ごした日々は志保の心に大きな影響を与えた。

幼少期の学校生活ではあまり良い思い出がなかった志保にとって、
彼らとの日々はかけがえのないものとなっていた。

しかし、志保は恐れていた。

自分の意志ではなくても、犯罪に手を染めていた自分を、彼らは受け入れてくれるのだろうか　と。

深く考え込んでいる様子の志保に新一は、お前の問題だからゆっく
り考えればいい　と言だけ添えて、再び連絡をする約束をして電

話を切った。

いつかは話さなければならなかったこと。
それがたまたま、今になっただけだ。

そう自分にそう言い聞かせると、志保は、さっきから泣きじゃくっている子供の元へと向かった。

come back 全編(後書き)

続きます。

本当は次のお話し(後編)だけを投書くつもりで、とても短い予定だったんですが、どうしても新ちゃんと志保ちゃんを一緒に出したくて(^| ^;))

新志 コ哀は大の苦手ですが、この二人の絡みは大好きです。
原作では哀ちゃんと新一は、良き相棒として大切に合っているんだな と、勝手に解釈しております。

ちなみに志保ちゃんの結婚相手は、とりあえずは赤井さんのつもりです。

でもジョディ先生とも結ばれてほしいですけどね。

その前に、彼は生きていると信じています☆

come back 後編

「今日の事件は大変だったなあ！」

放課後、歩美・光彦・元太の三人は、新一の探偵事務所から帰路に着く途中だった。

今でもこうして新一の元へ通い、少年探偵団としての活躍の場を広げている。

辺りはウィンドウショッピングを楽しむ女子高生や、主婦が多く見られる。

楽しそうに笑う少女たちと何度かすれ違った。

そんな賑やかさとは打って変わって、光彦はふと、独り言のように声を漏らした。

「灰原さんは、元気でしょかねー…」

7年前、自分たちの前から突然姿を消した少女の名を呟く。

彼女は両親の都合で海外に行く　ということと、感謝の気持ちを綴った手紙を、三人にこっそりと渡していた。

三人がそれを見つけたのは、彼女が姿を消した翌日の教室での事だった。

「てっきり新一さんが、何か知っているとってたんですけどねー」

「うーん…」

「新一お兄さんは、自分の口からじゃ言えないって言ってたけど…」

「ぜってー何か隠してるよなー！」

その頃志保は、米花町のショッピング街にいた。

新生活に必要なものを買い揃えるためには、ここが適切だと判断したからだ。

「…ほんと、何も変わってないわね。」

数年前いたこの街は、マンションなど新しい建物はいくつか増えたものの、大きな変化は見られなかった。

（この街に馴染むためには、私も逃げてばっかじゃ駄目だよね、お姉ちゃん…）

「ありがとうございましたー」

目当ての品を買い終わり、店を出た志保に、突然懐かしい声が聞こえてきた。

「…哀、ちゃん……？」

「え、」

志保の目に入り込んできたのは、ついさっきまで自分を悩ませていた相手だった。

歩美は、背丈も格好も、想像していたものよりも随分大人びていた彼女をどうして《灰原哀》だと思ったのだろうか、自分でもわからなかった。

しかし、無意識のうちに声を発していた。

「え、灰原さん？」

「灰原なのか！？」

歩美の元へ駆け寄ってきた二人を見て、志保は自分の心が揺れるのを感じた。

——嫌われるのが怖いとか、そんなのどうだっていいじゃない。

——だって、ただ私は、この子たちに会いたかったただけなんだから。

志保は三人に対して真っ直ぐ向き直ると、口を開いた。

「いいえ、人違いじゃない？」

「え、そっか…。ご、ごめんなさい…」

ガツカリと肩を落として去ろうとする三人に向かって、志保は優しく微笑みながら、語りかけた。

「今は…灰原哀じゃなくて、宮野志保よ。」

それぞれが、新しい人生が切り開かれるのを感じた瞬間だった。

come back 後編(後書き)

志保ちゃん…好きです！

少年探偵団に段々と打ち解けて行く哀ちゃんを見ているのが大好きです。

たまにはこういうほのぼの系もいいかなー(^^)

今 平和2、新蘭1、快青1本でお話考えてますー。

構成は出来てるんですが、表現するのは難しいんですよ…

次回からまたゆるい感じでやっていきます！

「こんなお話書いてほしい」っていうのがありましたら、なんなりと(^^)

名前の理由（前書き）

こんばんはー。

今日は名探偵コナン73巻発売日ですね☆

久々の新展開（？）に
ドキドキです（＾|＾）

名前の理由

「なあ、なんで平次はあたしのこと“和葉”って呼ぶん？」

「はーあ？」

そんな間拔けな会話が交わされたのは、ある日の放課後のこと。

いつものように部活を終え、そしていつものように二人並んで帰路に着く途中だった。

そもそも、なぜ和葉の口からそんな言葉が発せられたかと言うと、それはつい数時間前の昼食時にまで遡る――：

「なあなあ、うちずっと思ってたんやけど、服部って女子の中で下の名前で呼ぶの、和葉だけやない？」

「へ？」

「あ、それ！うちも前から思ってたわ！」

それは突然友人が言い出した、とある事実から始まった。

和葉は今まで、考えたこともなかった。

「それはやっぱ、幼なじみだからで…」

慌てて弁解した和葉の言葉を、目の前の友人たちは卑しい顔で遮る。

「幼なじみいゝ？」

「本当にそれだけなん？」

その忌々しい顔の羅列に、和葉は一瞬怯んだ。

しかし彼女たちは瞬時に顔を元に戻し、真面目な顔になると、何事もなかったかのように話し始めた。

「なあ和葉、本当の理由知りたくあらへん？」

「えっ…」

「そうやそうや。そんな単純な理由なわけあらへんやろ…なあ！」

和葉を囲む彼女らは、首を大袈裟に縦横に振り、最もらしいポーズをとっている。

するとそこで丁度昼休み終了を知らせるチャイムが鳴り、会話はそこで一旦終了した。

クラスが慌ただしくなり、みんな一斉に次の授業の準備をし始めた。

午後の授業が始まって、和葉はさっきの会話が頭から離れずにいた。

考えれば考えるほど頭が混乱し、それはからかった本人たちが心配するほどだった。

何事も深く考えるのが苦手な和葉は、直接本人に聞いてみることにしたのだった。

「だーかーらぁ！なんであたしのことだけ下の名前で呼ぶん？平次が名前で呼ぶのって、女子の中であたしだけやん。」

和葉は、自分の周囲の女性の顔を次々に思い浮かべた。

クラスメイトの女子は和葉を除いて全員、名字で呼ばれている。

同年で自分と境遇も似ている蘭や、大人の女性は基本“ねーちゃん”という代名詞で統一されている。

考えても考えても、彼が下の名前で呼ぶのは自分だけだった。

「そんなん、お前が俺の幼なじみだからやろ。物心ついたときからそう呼んどったし…」

やっぱり、と和葉は心の中で呟く。そこまでは自分が考えていたのと全く同じだった。

「でも、中学の時、そのせいでからかわれたりしたやん。そんな時変えようとは思わなかったん？」

和葉は、中学生の時お互いを下の名前で呼び合うのが原因で、周囲に散々からかわれた時のことを思い出す。

当時はお互いとても嫌な思いをしたが、それでも平次はその愛称を変えようとはしなかった。

「なんや和葉、“遠山さん”とでも呼ばれたいんか？」

「そんなんちゃうねんけどっ…てか平次が“遠山さん”って……さぶう…。」

平次はじゃあかあしいわ、と言だけ反論すると、一瞬考えるような仕草をして再び語り始めた。

「んー…、そやなあ…。何やかんやいつも一番近くにいるんは和葉やし、自然とそうなるんやないか？

…んな事考えたって、和葉は和葉や。それは変えられへん事やし、誰がなんと言おうと俺がそう呼びたいんやから、今更変える気もない。」

「そっか…、そやな！」

和葉は自分が平次の一番近くにいることを改めて実感し、彼の強い意志を再確認できた。

それだけでもう、十分だった。

「今度はなんやねん。急に機嫌良くなりよって」

「ううん、何でもあらへん！」

平次は和葉の行動を不審に思いつつも、ボソツと呟いた。

「まあ、名字なら変えたってもええけどな。」

「ん？今何か言った？」

「何でもあらへん！」

「なんや気になるわ。教えてえな！」

「1500年くらい経ったら教えてやってもええで！」

「またあ…！？平次のドケチ！」

「何とでも言うてみ〜♪」

・ ・ ・

さっきの会話はどこやら、またいつものように、言い争い始める二人であった。

名前の理由（後書き）

これは私が原作を読んで思ったことです。

そういえば平次って、

「○○のねーちゃん」が多いなって。

こんなゆるーい感じで、
暫く続きます。

good morning (前書き)

新蘭です

good morning

——日曜、午前9時。

この家の主、工藤新一は
今日は珍しく自分の力で目覚めた。

日曜の朝は大抵、恋人の蘭によって叩き起こされるのだが、今日は違った。

いつものように泊まりに来た蘭は、夜遅くまで仕事に取りかかって
いたようで、
今はまだ、おそらく仕事をしていたソファで寝ているのだろう。

新一は顔を洗うと、
「よしっ」と言いながら、両手で頬をパシンと叩いた。

いつも蘭が来ている、ピンク色のフリルがついたエプロンを身に着けると、早速朝食の準備に取りかかった。

30分後には、食欲を誘う匂いがキッチンに充満する。

テーブルには不器用ながらも愛情の込められた、美味しそうな料理の数々が並べられた。

「そろそろ起きるかな…」

新一はエプロン姿でおたまを持ったまま2階へ上がり、ドアを開けてそっと覗き込んだ。

「蘭、起きたか…?」

新一がソファに目をやると、そこにはまだ、気持ちよさそうに眠っている蘭の姿があった。

「おーい蘭、朝食出来たぞ」

「……ん……」

彼女にとっては少し大きめの自分のワイシャツを、一枚だけさらりと羽織って眠っているその無防備な姿に、新一は一瞬頬を紅く染めた。

「夕べは遅くまで仕事してたみたいだし、もう少し寝かせてやるか」

新一は蘭の頬にキスを一つ落とすと、機嫌良く部屋を出て行った。

長くて、短い一日が始まる

good morning (後書き)

今回は短めですネっ

短編だけじゃなくて、

一度がっつり連載モノをやってみたいと思ってるんですけど、
ネタがないんですよね（^^;）

いつになるかわからないけど、なんか書いて欲しいモノとかあったら、是非アドバイスを願いますm（＿）m

自分でも構想練ってみよっと！

ほった（前書き）

ちよつと更新空いてしまいました。覚えてますかね（笑）？劉生です。

文化祭やら予備校やらが一段落したので、更新しようと思った矢先、なんとm v携帯が壊れまして…！

快青の小説をメールで執筆中で、もうすぐで完成だったので、ショックでした（TOT）

今はまだ仮携帯なんですが…

というわけで？短いですが、平和書いてみました。
次は快青書くぞ！

ほった

学校からの帰り道。

あたしはふと、

あたしの半歩前を歩く、平次の横顔を見てみた。

平次はあたしの視線には気付かん様子で、
今はずーっと、先週の剣道の試合の話をしている。

単なる自慢話や。

そんなこと自慢せんでも、平次のかっこよさはあたしが一番、
よくよく理解しとるつもりなんやけど。

……あかん、平次の顔ずっと見とったら、なんか
ぼーとしてきたわ…。

平次のほった、黒くてゴツゴツしてるイメージやったけど、よく見るとなんか気持ちよさそうな…。

触ってみたいなー

触ってもええかなー

触りたいな――…

「んでな、そんな時この俺が……って和葉、聞いとるんか……」

《ぷにっ》

「……なんや、思っとなより全然堅いわ。」

「なっ、なんやねんいきなり！なんやねん、そのがっかりしたような顔はー！！」

「……はあ、」

「おっ、俺のせいか！？お前の期待に沿えなかった俺が悪いんかー！！？」

そんな微笑ましい光景を、電柱の陰からこっそり、にやけ顔で覗いている者が一人。

「平次と和葉ちゃん、今日もごつつ仲ええなあ」

その手には何故か、その場にそぐわない、家庭用のビデオカメラが。

「これでまた、“平次の成長の記録 高校生編？”に追加できるわあ」

未だに言い争っている本人たちは当然、その不審な人影には気がついていない様子。

「二人の結婚式で御披露目するのが、ほんま楽しみやわあ」

そういって、着物姿の美しい婦人——服部静華は、静かに姿を消したのであった。

オンナジ リユウ（前書き）

【定期】Twitter始めました。主にコナン、その他アニメ、ちよこつと勉強

について呟いております。

絵なんかも描いたりしてますが、シャーペンだし超へたっぴです（
^^;）

よかったらユーザー情報のところから飛んでみて下さい。

オンナジ リユウ

私、中森青子は
つい最近、幼なじみの黒羽快斗とつきあい始めた。

快斗は私のこととっても大事にしてくれてる。
それは、すっごく伝わってくるんだ！

…でも、快斗は一体、青子のどこが好きになったんだろう？

だって青子は周りの人からよく、子供っぽいつて言われる。

それは自分でもちよつとは自覚してるんだけど…

青子の周りにはとっても魅力的な子がたくさんいるの！

特に友達の紅子ちゃんはすごく大人っぽくて美人さんだし、女の青子でも憧れちゃう！

紅子ちゃんは快斗に気があったけど、快斗はそれを全然気にしてなかったみたいだし…。

快斗はあんなに素敵な紅子ちゃんじゃなくて、青子を選んだんだよ！

それはすごく嬉しいことのはずなんだけど、同時に青子のどこが好きなんだろう？ って思っちゃって…

直接快斗に聞いてみることにしたんだ。

「ねえ、快斗は青子のどこが好きなの？」

「はっ？」

「だって青子は紅子ちゃんみたいに美人でも、スタイルよくもないし…」

何だか、自分で言ってるだんだん悲しくなってきたよ…

「まあ確かに青子は胸もないし大して美人でもないけど…」

「ひどーい」

快斗はいつも調子で、青子をからかっていた。

「じゃあ逆に、何で青子は俺を好きになったんだよ」

急な質問にびっくりする間もなく、青子はこう答えていたの。

「そ、そんなの……そんなの快斗だからに決まってるじゃない！だ

って、快斗以外の人は考えられないもん！」

「俺も。」

「…へっ?」

「俺も、おんなじ理由。」

快斗は私の方に振り返って、ちよつとだけ頬を赤らめてそう言ったの。

快斗が言った言葉は全然理屈でもなんでもなかったんだけど、何だか妙に納得しちゃって……。

だって、それは快斗と青子が同じことを思っていたってことだもんね！

快斗のどこが好き、

っていうわけじゃなくって、青子は快斗じゃなきゃだめ。

快斗も、青子を必要としてくれている。

それだけで、十分な理由だった。

「…そっか。そうだよね。」

「……おう／＼／」

例え幼なじみじゃなかったとしても、私はあなたに恋をする――…

オンナジ リユウ（後書き）

2週間近くかかって、やっとケータイが戻ってきました。

メールも無事でしたのでこのお話も一から書かなくてすみません（
^^;）

さて、次回からネタ切れです。
どうしましょう……（TOT）

a n i g h t m a r e (前書き)

コ蘭です。

ちよっとコナン君痛めつけちゃいました(笑)
楽しかったのは
ここだけの話

a n i g h t m a r e

「……っうわああー!!」

——最近、よく嫌な夢を見る。

「っハア、ハア……クソッ、またか……」

隣を見てみると、この家の主である小五郎が大口を開けて眠っていた。

大丈夫、いつもと何ら変わりはない風景だ、そうわざと自分自身に言い聞かせた。

汗でぐっしょり濡れたパジャマを身軽なTシャツと短パンに着替えると、コナンは台所へ水を飲みに行くために重い腰を上げた。

部屋へ戻る際こっそりと蘭の部屋を覗いてみた。

蘭は、規則正しい寝息をたてて眠っているようだった。

コナンはその様子に安堵すると、再び自分の寢床へと戻って行った。

何故だかわからないが、俺は元の姿、高校生探偵の工藤新一に戻っていた。

久しぶりの学校。

あいつら元気かな、突然行ったら驚くかな。

蘭のやつ、俺のこと見てなんて言うかな――

そんな、軽い気持ちだった。

「つはよー！」

ガラッと勢い良く、教室のドアを開ける。

いるいる、みんないる！

しかし、みんなの様子がおかしいのに気付いたのはその直後だった。

反応が、ない

宿題を必死に写しているやつ、読書をしているやつ、机に突っ伏して寝ているやつ、友達との会話を楽しんでいるやつ……

そいつら全員、誰一人として俺の方を見ようとはしなかった。

最初は何かの冗談かと思った。

「おい、中道…」

親しい友人のいくつかに声を掛けても、自身の声が虚しく、まるでその空間に吸い込まれるかのように消えていくだけだった。

なんで？なんでみんな俺のこと無視するんだ？

「佐藤、中村、鈴木……！」

「お前ら本当は俺の声聞こえてんだろ！？…なあ、何とか言えよ！
なあ！」

その時、俺の視界によく見知った人物の姿が映った。

「蘭……」

名前を呼ぶと、蘭はゆっくりと俺の方を振り返った。

しかし、何故だか俺のことを見る蘭の眼が、いつもとはどこか違った雰囲気醸し出していた。それはまるで、今まで見たことがない、不審なものを見るような――…

「よかった、蘭だけは俺のこと見てくれんだな。ったく、なんなんだよあいつら。俺のこと無視しやがって……蘭？」

蘭が何も言わないことを不審に思った俺は、尋ねるように蘭の名を呼んだ。

すると蘭は、冷め切った目でこう言い放った。

「……あなた、だれ？」

「え？」

そこで俺は、やっと気が付いた。

自分の身体が、半透明に透けていることに……

「え、ちよつ、蘭!？」

辺りはいつのまにか教室ではなく、暗闇の中だった。

そこは俺と蘭の二人きり。

でも何故か、俺の目に映っている蘭は白黒で。

モノクロ

加えて、二人の距離はいつそう遠退いてゆく。
それは俺が蘭から離れているのではなく、蘭が俺から遠ざかっているのだと気が付いた。

「さようなら、新一。わたし、もうあなたのこと――」

俺は先の見えない闇の中を必死に走った。必死に蘭を追った。……
なのに！

「畜生、なんで追いつけねえんだよ!……蘭!」

「待てよ、待ってくれよ……らん、蘭……!」

「らあ————ん!!」

「…くん、コナンくん!」

「……へ?」

「大丈夫? またうなされてたみたいだけど…」

「う、うん…」

時刻は夜中の3時を指している。先ほど床に付いてから、まだ2時間ほどこしか経っていなかった。

「ちょっと待ってて、今お水持ってくるからね」

「うん、ありがとう…」

コナンは蘭の後に付いて、再び台所まで行った。

「はい、お水」

「ありがとう蘭姉ちゃん」

コナンはそれを一気に飲み干すと、蘭に質問を投げかけた。

「蘭姉ちゃんは どうして…?」

「んー、なんだか急に目が覚めちゃって」

「そっか、大丈夫?」

「私は平気だけど…、コナンくんこそ大丈夫?ここ一週間くらい毎日うなされて、ロクに寝れてないみたいじゃない。目の下に隈がくつきりできてるよ?」

「そうかな……あはは」

「何か悩み事があるなら、蘭ねーちゃんにいつでも相談していいのよ」

そう言う蘭は、自分の胸を力強く叩いた。

「ん、ありがとう」

コナンは、夢で見た自身の不安を思い出すように、蘭に尋ねた。

「蘭姉ちゃんはさあ……今でもまだ、新一兄ちゃんのこと好き？」

「え？」

「新一兄ちゃんのこと、ちゃんと覚えてる？」

コナンの思いがけない質問に、蘭は一瞬その綺麗な瞳をパチクリとさせた。

そしてその後すぐに、彼女らしい笑い声をして見せた。

「…っあはは！私が新一のことを忘れるわけじゃないじゃない！だってもう17年も一緒にいるんだもの。」

「……。」

「そうだなー、今までずっと一緒にいた分、急に半年以上も会えなくなる時さすがに寂しくなるけど――」

「け、けど？」

「…だけど、新一が“待っててほしい”って言ってくれる以上、わたしが新一のことを忘れるわけがないよ。」

その言葉に、コナンは自身に溜まっていた何かがスーッと抜けていくのを感じた。

「……そっか、よかった」

「どうしたの？急にそんなこと聞くなんて」

「ううん、何でもない！…なんか安心したら眠くなって来ちゃった。
お休み、蘭姉ちゃん。」

「お休み、コナンくん。」

自分にはちゃんと、帰ってくるべき場所がある。
自分のことを待っていてくれる人がいる。

工藤新一という人物は今でこそ影のボールに包まれているが、それ
を引き剥がす時が、きっとやって来るはずだ。

そして元の姿に戻ったら、本当の姿、本当の声で蘭に自分の気持ち
を伝えるつもりだ。

——そのためには自分自身にも、負けてちゃいけないよな。

そう考えると、3度目の睡眠はぐっすりと眠れそうだと
コナンは思った。

a n i g h t m a r e (後書き)

私情で大変申し訳ないのですが、しばらく小説の更新を休ませていただきます。

来年の3月頃までを予定しています。

約1カ月ぶりの更新で

こんなこと言うのも何ですが

t w i t t e rではコナンについて呟いていきますね。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0888v/>

ミックスジュース

2011年11月15日14時28分発行